
クロス オブ ヒーローズ

まっつまつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロス オブ ヒーローズ

【Nコード】

N6624G

【作者名】

まつつまつ

【あらすじ】

パラレルストーン、その力が解放すべき時、すべてを巻き込んだ壮絶な戦いが始まろうとしている・・・その他の作品・・・ブリーチ、魔法少女リリカルなのは、機動戦士ガンダムSEED、戦国BASARA、テイルズオブイノセンス、シャーマンキング、メルヘヴン、メタルスラッグ

プロローグ 事件

「はぁ・・・はぁ・・・」

少年は走っていた。なぜならそれは・・・

????

「いたぞ!!」

????

「逃がすな!! 殺せ!!!!」

????

「くっ! しつこい!」

ガーパーピ、無線のような音が聞こえそして声も聞こえた

????

「こちらメデイ!! タイト!! 応答して!!!!」イト

「こちらタイト!! ワリィ・・・ ちよつとまずったぜ、ま

さかここまで援軍呼ぶとわよ・・・ 世も末だな。」

メデイ

「なにいつてんのよ!! それより無事なのタイト!!!!」

タイト

「大丈夫だって! あともおすこしで逃げ切れ・・・っ!!!!」

タイトが逃げたところは崖であった。 さらに謎の軍団により追

詰められてしまった。

謎の軍団の隊長

「さあ・・・追い詰めたぞ！　今なら返してくれば命の保証はしよう・・・だからそれをこちらに渡せ！！　抵抗するなら・・・」

「と言って謎の軍団たちはマシンガンのようなものをタイトに突き付けた。」

タイト

「悪いがおまえ達に返すぐらいなら・・・死んだ方がまだましだ！！！！」

そう言っただけでタイトは崖に向かってあるものを投げた。

謎の軍団の隊長

「な！！　きつ貴様！！！！　なんて事を・・・！！」

タイト

「ワリイ・・・メデイ・・・」

メデイ

「え！！」

タイト

「俺・・・死んだわ・・・」

メデイ

「え！！！！　タイトなにいつてんの！！！！　応答して！！！！」

タイト！！！！　タイ・・・」

ブツン！！！！　と無線が切れた音と同時に・・・

謎の軍団の隊長

「射てー！！！！」

ズダダタタタ！！！！ とマシンガンが発砲され、タイトは蜂の巣にされた。意識がもうろうとしながらタイトは、

タイト

（頼む・・・誰か俺たちの故郷を・・・世界を救ってく・・・れ・・・）

そしてタイトは崖に落ちていった。

謎の軍団

「隊長！ どうしましょう。このままでは我々の計画が・・・」

謎の軍団の隊長

「ええいわかっておる！！！！ どこにいったか検討がつく！！！！」

各兵は手当たり次第に探せ！！！！ 邪魔する奴は殺しても構

わん！！！！ 早急に捜し出すのだ！！！！」

「ハ！！！！」

と言って兵隊たちは隊長のもとから離れた。

謎の軍団の隊長

「さて・・・私も行くか・・・ エミルダークの未来のために・・・」

そして隊長も崖をあとにした。

そして、コレがきっかけで事件が起こる。全異世界を巻き込む壮大な事件が。

ブログ 事件（後書き）

はじめまして。初投稿です。正直心配ですがやってみました。この後いろいろな作品を出しますので皆様応援してください。よろしくお願いします。

第一章 並盛町の異変（前書き）

平凡（？）な日々を送っていた少年達、しかし最悪な異変が起きた。

第一章 並盛町の異変

キンコン・学校の時が鳴り響く、そこには制服をまとった生徒達が次々と正門から出ていき

「ばいばーい」や

「じゃあな」と言って正門から出ていく。

そしてある三人の生徒が違う話で盛り上がっていた。???

「ねえ獄寺くん、山本、これからどうするの？」

獄寺

「どうもしないっすよあんなめんどくせえもん。」

山本

「確かにめんどくさいよな、やる事ないしな！」

ツナ

「そうなんだ、はあ・・・また変にバカにされるだろうな・・・」

獄寺

「だっ大丈夫ッスよ十代目！！ 十代目ならなんとかなるっす！！、バカにするやつはこのおれがたっぷりとしめてやりますよ！！！」

ツナ

「いやいやいや獄寺くん！ さすがにそれはまずいって！！！」

山本

「あっははは！！ まあ確かにツナならなんとかなるさ！！！」

ツナ

「やっ山本……」

彼らは並盛町とゆう町の並盛中学に通っている中学生だ。

ツナのことを十代目としたっている少年が獄寺隼人。

ツナを笑いながら慰めているのは山本武。

そしてため息をつきながらがつかりとしている少年が沢田綱吉、通称ツナである。

どこにでもいる普通の中学生だが彼らにはある秘密があった、それは……

???

「今の話は聞いたぞ」

どこからか声が聞こえた、しかし辺りを見渡したが誰もいない。

その時上空から一人の赤ん坊がツナの頭にクリティカルヒットした。

ツナ

「ぐへー!!」

と奇声を上げて地面に倒れた。

獄寺

「リボーンさん！」

山本

「小僧！」

ツナ

「いててて……り、リボーン！！
いきなり何するんだよ！！」

リボーン

「そんな事はどうでもいい、それよりもツナ！
中間試験が近い
そうじゃないか、俺も家庭教師として、お前を立派なマフィアにするためにも人肌脱ぐかな。」

ツナ

「だから俺はマフィアになんかにはならないってば！！！！」

そう、彼らはボンゴレファミリーとゆうマフィアのファミリーでツナこと沢田綱吉はその十代目ボス候補である。

獄寺

「安心してください十代目！！
右腕であるこのおれが手伝いますよ！！」

山本

「俺も手伝うぜツナ！
なんだか面白そうだしな！！」

獄寺

「おめえは引っ込んでろ野球馬鹿！！！！」

ツナ

「いやいや獄寺くん、山本！
そんな事に付き合わなくていいっ

て!!!!」

そう言う会話をしている時、リボーンが空を見る。

リボーン

「やべえなこりあ・・・」

三人

「「え!?!」」

三人はリボーンに釣られて空を見る。

そこには悪雲がかかっていた、雨雲にしてはかなり黒く今にでも雷が落ちそうだった。

山本

「確かにヤバいなこれは・・・今にでも降りそうたぜ。」

獄寺

「十代目!! 急いで帰りましょう!!」

ツナ

「え、あっうん!」
(なんだろう・・・このもやもや感・・・
嫌な予感がする・・・)

四人は足を動かした。

しかしその時悲劇が起きた、びかっ!!!! っと光った瞬間、ツナ頭に雷が落ちた。

獄寺

「十代目 あぶねえ!!!!」

山本

「避けるツナ!!!!」

ツナ

「え!?!」

しかしツナが見たときにはもお遅かった、ツナの頭に雷が直撃した。

ツナ

「はれひれふはへやなさa. t p. t a t 4 5 7 4 たやまお!!!!」

獄寺

「十代目~~~~!!!!」

山本

「ツ、ツナ!!!!」

リボーン

「.....っ!!!!」

ツナの近くにいたせいにか、三人も雷に感電した、そしてしばらくして大爆発がおこった。

そして最悪な出来事がおこった・・・

男子生徒A

「おい!!! 今爆発しなかったか!?!」

男子生徒B

「ああ確かに!!　　すぐに行こうぜ!!」

ふたりの男子生徒が爆発した所へ行ってみたが・・・

男子生徒A

「誰も・・・いない?」

男子生徒B

「おい!　　これ・・・うちのバックじゃないか!?」

男子生徒B

「本当だ!!　　名前は・・・」

そう、そこにはバックだけがあってツナ達の姿はどこにも無かった。

そしてこの瞬間、戦いの幕が今上がろうとしていた。

第一章 並盛町の異変（後書き）

いかがでしたか？

文字数の問題で一つしか作品を

出せませんでした。次は出します。

ヒン

トは「炎をまとう少女」です。

おもお分りですね？

それではまたお会いしましょう、

さよなら。

第二章 謎の町 御崎市（前書き）

ツナが目を覚ますとそこは御崎市と言うところだった。そして御崎市に異変が起こるとき、炎髪灼眼の少女が現れる。

第二章 謎の町 御崎市

???

「・・・だい・・・しっ・・・り・・・き・・・」

ツナ

「ん・・・ん」

ツナは目を覚ました、そこには団体の男子と女子がいた、ツナはゆっくりと体を起こした。

女子A

「大丈夫君！ 怪我はない!？」

ツナ

「あっはい!! ありがとうございます。」

男子A

「しかしお前見たことのない制服着てるな」

ツナは不思議に思った、並盛中学は違う意味で有名だ、知らない訳がほとんどない。

ツナ

「あの・・・ここって並盛町ですよね・・・」

男子B

「なみもちょう?？」 ここは御崎市だぜ?」

ツナ

「みつ御崎市!!?」

ツナは聞いたこともない町の名前に驚いた、確かによくみたら見たことのない建物や店が並んでいた。

男子B

「何はともあれ気おつけろよ、それじゃ!」

男女団体はツナのそばから離れた。

ツナ

(えー・・・と確か俺は獄寺くんと山本と一緒に帰ってリボーンがあらわれて雨降りそうだから急いで帰ったら雷が落ちてきてえーと、えー・・・と・・・)

ツナは頭を押さえながら今までの出来事を焦りながらふりかえった。

ツナ

「そうだ!! 獄寺くん、山本、リボーン!!」

四人の存在を思い出す、ツナは彼らの名を叫びながら捜す事にした。

三時間後

ツナ

「やっぱりダメだ・・・見つからないよ・・・」

ツナはため息をつきながらそこにあったベンチに座った。

辺りを探しても、人に聞いてもそれらしき人物は見かけなかった。

ツナ

「これからどうしよう・・・」

ツナはそおいいがら空を見た。

すると突然空が真っ黒になり辺りが真っ赤に染まった。

ツナ

「な！？　なんだ！！？」

突然の出来事にツナはびっくりして立ち上がった。

すると・・・

????

「さ～～つてと！　今日はどの人間にする??？」

????

「そうだね～～・・・てか、こうゆうときは片っ端から食っていくのが一番だよね～～！！」

????

「あ～～確かに！！　お前って偉いな～～」

????

「だろ～～？　それじゃあ・・・」

ツナ

「み、皆さん!!!! 逃げてください!!!!」

ツナが周りの人間に声をかけた。

しかし誰一人も動こうとはしなかった、まるで時間が止まったかのよう
うに。

ツナ

「そっそんな!!!! なんで!!!!」

????

「「いっただっきまーす!!!!」」

二匹の化け物がそういったとたん、人々から青い炎が現れた。

そしてその青い炎は化け物二匹吸い込まれるように食われていった、
そして食われた人間はそのまま姿を消した。

ツナ

「ん! 　　んな~~~~!!!!」

ツナは目の前の不思議な出来事にツナ、はさらにびっくりしてしり
もちをついた。

その衝撃で二匹の化け物がツナの存在にきずいた。

化け物 A

「ん~? 　　なんだこいつ?」

一匹の化け物がツナの方に近づいた、ツナは腰が抜けて動けなかった。

化け物 B

「何でこいつ動けるんだ??」

化け物 A

「まさかこいつミステスか?」

化け物 B

「もしかしたらな!!! それじゃ仲良く・・・」

化け物 A

「そうだな!! んじゃ早速・・・」

二匹の化け物がツナを捕まえようとした。

ツナ

(もっもうだめだぁ・・・)

ツナがそう思い目を閉じた。

しかしその時、ザシュ!!!! と何か切れる音がした、ツナが気が付き目を開けて見るとそこには一人の少女が刀を構えて立っていた。

そして少女はツナを見た、髪は炎髪で瞳の色は灼眼、刀には炎がまといっていた。

化け物 A、B

「「いって~~~~!!」

マジでいって~~~~!!」」

???

「お前は隠れろ」

ツナ

「え!!」

???

「いいから早く隠れろ! 存在を消されたいのか!!」

ツナ

「ひ! ひい!! わっわかった!!」

ツナは少女のゆわれたままに物影に隠れた。

???

「気をつけろシャナ!! こいつらは・・・」

シャナ

「何? アラストール?」

少女の方はシャナでありシャナにかけているペンダントはアラストールというらしい。

化け物 A

「てっテメエ!! なにしやがんだ!!」

化け物 B

「俺たちを怒らせたらどうなるかわかってんだろぅなああ!!?」

シャナ

「ふん! ただの紅世の徒ぐせのともがらになにができる?」

紅世A

「俺たちをただの紅世の徒と思うなよ？」

するとシャナが切った腕が粘土のようにぐにゃぐにゃ動きだした、そしてその腕はさっき切った紅世の徒と同じ姿になった。

シャナ

「敵が増えたぐらいで！」

シャナは気にせず紅世を切っていく。

しかしそれは逆効果であった、切っても切っても切った腕や足や胴体から分裂して増え続けるだけだった。

シャナ

「くっ！！ しつこい！！！」

シャナは増え続ける紅世から間合いを取ろうとバックステップをした、しかし着地した瞬間紅世に後ろから手足を捕まれ体の自由を奪われてしまった。

シャナ

「しってしまった！！ 離せ！！！！」

振りほどこうとするが意外と力が強くなかなか振りほどけ無かった。

紅世A

「へへへ・・・終わりだなあ、フレイムヘイズ！」

紅世B

「あの世でおれ達と相手をした事を後悔することだなあ!!」

二人の紅世が腕を鋭い針のような腕にしながらシャナに近づいていく。

ツナ

「どっとうしよう!!　　まずいつて!!」

ツナは隠れながらどうすればいいのか考えていた。

ツナ

「せめてあれになれば助けられるのに!!!!」

ツナは自分の弱さに後悔した。

その時

????

「ならなるか?　　そのあれに。」

ツナ

「え!!　　まさかその声・・・リボ」

バキューン!!!

ツナはふりかえった瞬間、銃の弾が脳天にヒットしてそのまま倒れた。

一方今だに絶体絶命の危機におちいつているシャナは今だに振りほ

どけずにいた。

アラストール

「シャナ!!!!」

シャナ

「くっ!! このままだと・・・」

二人の紅世がシャナに近づく。

紅世A、B

「「死ね~~~~!!!!」」

シャナは眼を閉じた。

ガシッ!!!!

意外な音に驚きシャナは眼を開けた。

そこにはツナがいた、しかしふいんきが違った。

ツナ?

「大丈夫か?」

両手が炎でまとっていておでこに炎が灯っていた。

紅世A、B

「「な!!! お前さっきの!!!!」」

ツナ?

「切って増えるなら・・・燃やして溶かすまでだ!」

ぼう!!!
　　っとツナの両手の火が一気に燃え上がり紅世の腕が溶けた。

紅世

「「あちちち!!!
　　あち!!!」」

ツナは溶け切った腕を確認すると二匹の紅世を蹴飛ばした、二匹の紅世は吹っ飛ばされ紅世の大群に突っ込みそのまま紅世の大群はドミノ倒れになった。

そしてシャナの手足をつかんでいる紅世を高速の動きで振りほどいてあげた。

シャナ

「お前・・・何物だ？」

体の自由を取り戻したシャナがツナに質問する。

ツナ？

「俺は・・・お前を助けるものだ。」

ツナがそう言うのと紅世の方に向いた。

ツナ？

「お前達がそのていどなら・・・」

ツナの手とおでこの炎が一気に強くなった。

ツナ？

「拍子抜けだぜ！」

ツナがそう言っていると紅世に向かって高速でダッシュした。

第二章 謎の町 御崎市（後書き）

いかがでしたか？

ついに登場しましたね。

微

妙なところで終わってすみません。

いつまで続くかわかりませんが応援よろしく願います。

では、またおあいしましょう。

第三章 御崎市の戦い（前書き）

ツナが覚醒した今、御崎市による戦いが今始まる。
そしてエミル
ルダークは・・・

第三章 御崎市の戦い

紅世 A

「てっテメエ!! いい気になるなよ!!!」

紅世 B

「俺たちの力を舐めんな!!!」

そういった瞬間、紅世の大群が一斉に襲い掛かって来た。

しかしツナはそれを気にせず紅世の大群をなぎ倒していく。

そして紅世の大群はツナによって全滅した。

紅世 A

「なっ なっ なんだこいつ!!!」

紅世 B

「おかしいだろこれ!! おかしいだろこれ!!!」

ツナ?

「お前達で最後だな、覚悟しろよ。」

ツナが言った瞬間、シャナがツナの隣に現れた。

シャナ

「そこのお前、私も手伝おう、一人じゃきついだろ?」

紅世 A

「はあ！？ 馬鹿かテメエは？ お前が出たところで何になる？」

紅世 B

「むしろそこにいるガキの足を引っ張るだけじゃないのかあ？ ヒヒヒ！」

確かにシャナが出て来たところでなんにもならない、また切つて数を増やすだけだ、しかし・・・

シャナ

「それはどうかな？ さっきの戦いを見てお前達の弱点がわかった」

紅世 A・B

「「なにい？」」

ツナ？

「信用していいんだな？」

シャナ

「ああ、好きにすればいいさ。」

お互い顔を合わせた、そして二人は再び紅世の方に向いた。

紅世 A・B

「「だからいい気になるなって言ってんだろぅが！！！」」

二匹の紅世が二人を襲おうとした、しかし攻撃した瞬間、ツナとシャナは一瞬で避けた、間合いを取った後、一気に距離をつめてツナはボディブローを、シャナは切らずに峰打ちで攻撃した。

バキィィ！！！つとスパアァン！！！！の音が一齐にした。

紅世A・B

「「ごばああ！！！！」」

そのまま大きく吹き飛ばされた紅世はビルの壁に激突した。

そして、シャナとツナが大きく飛んでツナは飛び蹴りを、シャナは突きの構えをしながら紅世に突っ込んでいった。

ツナ&シャナ

「うおおおおお！！！！」

バツツキィィィ！！！！

ブシュウウウ！！！！

ツナは紅世の顔面を、シャナはもう一匹の紅世の腹を貫いた。

紅世A

「ばっ馬鹿な・・・そ・・・んな・・・」

紅世B

「そんな・・・馬鹿なああ・・・」

二匹の紅世はそのまま消滅した。

そしてツナの頭と両手についた炎がシュウー・・・っといって消えた。

ツナ

「・・・あれ？」

ツナは我に戻った。

シャナ

「おいお前、どこのフレイムヘイズ？」

ツナ

「はぁ!!!？」

ツナはわけのわからない単語に戸惑った。

ツナ

「ちよつちよつと待って!! フレイムヘイズって何？」

シャナ

「とぼけるな! お前がフレイムヘイズじゃなかったらお前は今動けないはずだ!」

ツナ

「知らないよそんなの!!」

シャナがツナに詰め寄ってくる、ツナはだんだん後ろに下がっていく。

シャナ

「・・・まあいい、お前がフレイムヘイズだってことはすぐにわかるからな、アラストール、どう? わかる?」

アラストール

「・・・」

シャナ

「アラストール？」

アラストールが黙り込んだ。

アラストール

「シャナ、こいつは・・・」

シャナ

「何？」

アラストール

「・・・フレイムヘイズじゃ無い、ましてや零時迷子や紅世の王でもないぞ！」

シャナ

「何！？　つまりこいつは・・・」

アラストール

「こいつは・・・ただの人間だ」

シャナはびっくりした、なぜただの人間が封絶^{ふうぜつ}のなかで動けるわけが無い。

????

「こいつはただの人間じゃないぞ」

ツナ

「その声は・・・リボーン!!!」

声の方に振り向くとそこには小さな赤ん坊が立っていた、リボーンである。

リボーン

「こいつはボンゴレの血を受け継いでいるゆうしょ正しいボンゴレのボスだ、だからこいつはただの人間じゃねえぞ。」

ツナ

「だから!!! 俺はマフィアのボスにはならないってば!!!!」

シャナ

「ちょっと待って! ボンゴレ? そんなフレイムヘイズ聞いたことないぞ!」

ツナ

「いやいや違うって! だいたいフレイムヘイズって何なんだよ!!!」

シャナ

「だからとぼけるな! さっきも言ったが封絶の中に普通の人間じゃ動けないはずだ!!!」

ツナとシャナによる言い争いが始まった。

????

「シャナ、その子に何を言っても無駄よ」

????

「シャナ！」

シャナ

「弔詞の読み手！　悠二！」

一人の女性と一人の少年の隣にツナにとって見慣れた少年達がいた。

獄寺

「十代目！！」

山本

「ツナ！！」

ツナ

「獄寺くん！！」

山本！！

無事だったんだね！！」

獄寺

「十代目こそよくご無事で！！」

山本

「これで全人そろったな！」

シャナ

「感動の再会はそれまでにしてほしいのだから・・・」
喜ぶのもつかの間、シャナが話に割り込んだ

獄寺

「なんだテメエは！　いちいち口を挟むんじゃない・・・」

シャナ

「それよりも質問に答えろ、お前達は一体何物だ！」

獄寺

「何でテメェ見たいな奴に答えなきゃいけないんだ!!」

シャナ

「いいから質問に答えろ! 場合によっては貴様らを殺すぞ!」

獄寺

「上等だコノヤロウ!! 構えな!!」

獄寺はダイナマイトを構え、シャナは刀を構えた。

ツナ

「獄寺くん!! ストップストップ!!」

悠二

「シャナ!! 少し落ち着いて!!」

獄寺&シャナ

「「しかし!!」」

二人の言葉がかぶりさらに睨み合う二人。

山本

「まあまあ二人とも落ち着けて、俺たちの事教えてやるからよ。」

弔詞の読み手

「確かに少年の言うとうり、ここは落ち着きましょう。」

獄寺とシャナはそれぞれの武器をしまった。

ツナ

「さっきも言ったけど僕達は紅世の徒とかフレイムヘイズとかじゃない、本当にただの人間だよ。」

シャナ

「・・・ならなぜ封絶の中を普通に動ける？
普通じゃありえないぞ。」

ツナ

「それは・・・僕達もわからない。」

しばらく沈黙が続いた。

リボーン

「とにかくツナ達を元の世界に帰る方法を考えるしかねえな・・・
つうわけでしばらくやっかいになってもいいか？」

ツナ

「はあ！！！！」

獄寺

「なっ！！！！」

山本

「え！！！！」

三人は一斉に声をあげた。

弔詞の読み手

「確かにしょうがないわね、帰るすべが無いのなら仕方ないし。」

シャナ

「しかし弔詞の読み手!! こいつらは・・・」

悠二

「シャナ、仕方ないよ、今は協力しよう。」

シャナは納得いかない顔で黙り込んだ。

リボーン

「じゃあそうゆうわけでよろしくな。」

ツナ

「勝手に決めるな~~~~!!!!」

ツナの叫びが町にこだました。

一方その頃

ある基地では・・・

エミルダーク隊員

「隊長!! 例の物が発見されました!!!!」

エミルダーク隊長

「そうか、やっと見つけたか、どこにあるのだ?」

エミルダーク隊員

「物質堺ナンバー36、時空管理局の中にあります。」

エミルダーク隊長

「時空管理局か・・・最悪なところになってしまったな・・・」

エミルダーク隊員

「どうしますか隊長？」

エミルダーク隊長

「軍を連れてすぐに現地にむかうぞ！　今回は私もでる！！」

エミルダーク隊員

「ハ！！！！」

タタタタ・・・隊員はさっぴていった。

エミルダーク隊長

「すぐにでも取り返してやる・・・エミルダークの未来のために・・・」

そういった後、隊長は愛用の剣を腰にかけ基地を後にする。

第三章 御崎市の戦い（後書き）

いかがでしたか？

次から違う作品が協力します。

ヒントは森羅エージェ

ントと管理局の白い悪魔が登場します。

次回もお楽しみ。

第四章 森羅と時空管理局（前書き）

ツナ達がいた世界、そこで森羅のエージェント二人組は時空管理局に協力を求めた、しかし突然事件が起きた・・・

第四章 森羅と時空管理局

ツナ達のいた元の世界に一台の高級車が走っている、その車は高速道路を走っていた。

そしてその高級車の中には二人のエージェントがいた。

???

「なあ零児くく・・・」

零児

「・・・なんだ小牟^{シャオム}」

小牟

「暇じゃ・・・物凄く暇じゃ・・・」

零児

「あのな・・・まだ一時間半ぐらいしかたっていないだろうが」

小牟

「それでも暇なものは暇じゃ!!
なあ零児く何か面白いことはないかの」

零児

「だったら寝てろ! そしたらそのうちすぐにつく!!」

小牟

「ん・・・確かに昨日の準備でほとんど寝てないからの、よし! ではお構いなしに寝させてもらおうかの!」

零児

「ああそうしろ、ついたら起こしてやる。」

小牟

「できればお目覚めキスとかの方が萌えるのじゃが・・・」

零児

「・・・川に叩き落として目覚めさせるシチュエーションならあるが・・・」

小牟

「じよ冗談じゃて!! 　だから我を三途の川へ目覚めさせるのはやめてくれ!!!」

零児

「冗談だ、だからおとなしく寝てろ。」

小牟

「わっわかった、それじゃおやすみ・・・」

小牟はそのまま寝込んだ、しかし・・・

零児

「おい、小牟。」

小牟

「なんじゃ零児、まさかもうついたっておちじゃなからう。」

零児

「着いたぞ。」

小牟

「・・・はぁ!!?」

小牟がびっくりしながら体を起こすと目の前には二人の行く目的の前まで来ていた。

小牟

「なんじゃい・・・まだ五秒しか寝とらんぞ!」

零児

「まさかこんな早く着くとは俺も思わなかったな・・・」

小牟

「まあよいではないか零児、さっさと仕事をすませるぞ。」

零児

「小牟、仕事内容は覚えているな。」

小牟

「わかつとるって! これでも森羅しんらのエージェントじゃぞ! ほれ、さっさと行くぞ!」

零児

「本当にわかっているのやら・・・」

そう、彼らは政府特務機関

「森羅」と言う組織のエージェントなのである、そして彼らが向かった先は時空管理局と言う所へ向かっていた。

車が止まり、二人は車の外に出た。

小牟

「ほっほゝ．．．なかなかでかい建物じゃのゝゝ」

零児

「確かに、俺たちの組織の建物よりもでかいんじゃないのか？」

でかい建物をみて感心していたそのとき。

???

「貴方たちが森羅のエージェント達ですね。」

小牟

「ん、そうじゃが？」

二人は声に気が付き振り向くと二人の女性が立っていた。

零児

「もしかして君達は時空管理局の．．．」

???

「はい、高町なのはといいます。」

???

「フェイト・T、ハラオウンです。」

なのはとフェイトは森羅の二人に手を差し伸べた。

零児

「政府特務機関森羅エージェント、有栖零児^{ありすれいじ}だ、よろしく。」

小牟

「ワシは小牟！ 同じく森羅のエージェントで零児のパートナーじゃ！ よろしくの！」

お互いに握手を交わした。

小牟

「しかしおぬしら・・・」

なのは&フェイト

「「？」」

小牟

「いい体しとるの、これはなかなか。」

小牟は二人の体をまじまじと見た、そこへ・・・

ゴチン！！！！

小牟

「あいた！！！！」

零児

「お前は人との接し方をわからんのか！！」

小牟

「冗談じゃて・・・そんなに怒ること無いじゃろ・・・」

なのはとフェイトは笑顔で二人を見た。

しばらくして零児と小牟はなのはとフェイトの案内で時空管理局の応接室に案内された。

なのは

「すみません、こんな忙しい時に呼び出したりして・・・」

小牟

「な～～に気にする事はない！」

零児

「確かに、多分お互い一緒の事かも知れないしな、さっそくだがコレを見てくれないか。」

零児はなのはとフェイトに新聞紙を見せた、その内容は・・・

” 並盛町で行方不明！ 理由は雷！？ ”

” 昨日午後、並盛町に住む三人の中学生が下校中行方不明となった、行方不明になったのは並盛中学かよう沢田綱吉君（14） 山本武君（14） 獄寺隼人君（14）で下校中、雷に直撃して爆発が起こりバックが置いてあるだけで行方がわからなくなってしまったと推測、警察は・・・ ”

なのは

「これは！」

フェイト

「まっまさか！」

新聞の書かれた事になのはとフェイトは驚きを隠せなかった。

零児

「君達が驚いているとゆう事は・・・そちらでも何かあったんだな・
・・」

なのは

「・・・はい、それにその新聞の記事と全く一緒の内容で。」

フェイト

「なのは・・・これで・・・」

なのは

「うん、この事件を合わせて三回目だね・・・」

小牟

「おいおい！ もしやそちらでもう二回も同じ事件があったのか
!？」

フェイト

「はい、今我々は調査を続けているのですが・・・」

零児

「・・・君達は”ゆらぎ” を聞いたことはあるかい？」

なのは

「はい、確か魔大戦が起こった発端とされている・・・」

フェイト

「管理局の資料に確か載っていましたが、しかし詳しくは・・・」

小牟

「そんなことじゃろうと思ったわい、零児、詳しい説明を頼むの。」

零児

「わかった。」

零児はゆらぎと魔大戦について詳しく話した。

零児達が住む物質の発展が進んでいる”物質界”

剣と魔法の”幻想界”

天使や神が存在する”天界”

悪魔や魔物が存在する”魔界”

この四つの世界は今から二百万年前、世界は一つだった、しかし邪悪な力で己の欲望のためだけに全異世界は戦いの渦に巻き込まれた。

魔大戦の始まりである。

その時に発生したゆらぎのせいで異世界はあり得ない出来事が起こり、全異世界は混乱と恐怖の渦に飲まれていった。

しかしその時、森羅のエージェント、有栖零児と小牟、そして異世界からの英雄達の活躍によってゆらぎは封印された。

零児

「・・・ここまではいいな？」

なのは&フェイト

「はい。」

なのはとフェイトはそういつてうなずいた。

零児

「そして今回の事件現場に俺と小牟が調査をしたんだ、そしたら・・・」

小牟

「そう、ゆらぎのねじれらしきものを感じたのじゃ・・・」

なのは

「そっそんな!!」

フェイト

「しかし! ゆらぎは完全に封印したはずじゃあ!!」

零児

「落ち着け! あくまでもらしきものだ、もしゆらぎならそこら辺にわんさか化け物がいたはずだ。」

零児の言葉になのはとフェイトは少し落ち着いた。

小牟

「性質も形も感じも皆ゆらぎに似ているのでなく、わしらはコレを”続ゆらぎ”と改名したのじゃ、んでここからが本題じゃ。」

零児

「続ゆらぎがまた発生しないように、調査を続けている、だが俺た

ちの搜索範囲では距離がなさすぎる、そこでこうゆう事件に詳しくそんな時空管理局に協力を求めて来たのだが・・・協力してくれないか？」

しばらく沈黙が続いた、しかしなのはとフェイトはお互い顔を合わせた後。

なのは

「私達もこの事件に詳しくそんな森羅の人達に協力を求めようと思いましたが。」

フェイト

「しかし貴方たちも我々に協力を求めているのであれば話は別です、どうか我々も協力させてください、全力を尽くします。」

なのはとフェイトは手を差し伸べた。

小牟

「おっしや！」

交渉成立じゃ！！

よろしく頼むの！！」

零児

「俺たちもできるだけ情報を集める、だからこれからもよろしく頼む。」

なのは

「はい！」

よろしくお願いします！！」

フェイト

「森羅の力、期待しております。」

再びお互いは握手を交わした。

フェイト

「そうだ！　なのは、例の物を・・・」

なのは

「わかっているよフェイトちゃん、コレを見てください。」

そういつてなのはがポケットの中からあるケースを取り出した、そしてケースをあけるとそこには丸い形の光る玉があった。

零児

「これは？」

なのは

「あの事件の初日の時に発見した物です、何か手がかりになればいいのですが・・・」

小牟

「ほう、どれどれ・・・」

小牟が玉を手にとった。

小牟

「これは・・・」

一気に緊張が走った。

零児

「何かわかったのか小牟。」

小牟

「きれいな玉じゃなく！　これは高く売れるのく！！」

なのはとフェイトは見事にずっとこけ零児はくだらないことを言う小牟に三発ぐらいに頭にゲンコツをした。

零児

「・・・真面目に答えろ小牟・・・」

小牟

「すつすまんすまん・・・今度は真面目にこたえるの。」

頭をさすりながら小牟はもう一度玉を調べた。

小牟

「・・・零児、こいつゆらぎと同じ力を感じるぞ・・・」

零児

「なに！　つまりそれはゆらぎ本体だとゆうのか！」

小牟

「いや、こやつはそれに似ているが若干つがう能力あるの・・・」

なのは

「その能力って、一体何ですか？」

小牟

「すまん、今の所ヘワシにもわからん、もう少し調べて見るしか・・・」

すると自動ドアから一人の女性があわてて入ってきた。

???

「なのは!! フェイト!! 大変や!!」

なのは

「どっとうしたのはやてちゃん、そんなにあわてて」
女性の名前ははやてとゆうらしい。

はやて

「訳のわからん軍隊がこっちに攻めてきたんや! 今スバルとティ
アナが対抗しとんやけど数が数やから押し負けとんねん! この
ままやとスバルとティアナがやられてまう!!」

なのは

「え!! スバルちゃんとティアナちゃんが!!」

フェイト

「なのは!!」

なのは

「うん! すみません有栖さん、小牟さん! しばらく待って
くれませんか! すぐに終わらせて来ますから!」

零児

「おっおい君達!!」

そういつてなのはとフェイトは応接室を後にした。

零児

「・・・はやて・・・といいましたよね。」

はやて

「はっはい、八神はやてです」

零児

「昨晚俺たちが送った荷物はどこにしまいましたか？」

はやて

「え？ 確か大切な物だから開けずにどこかにしまっ
て置いてくれと書いてあったので多分倉庫に・・・」

小牟

「すまぬがその倉庫に案内してくれぬかのお・・・」

はやて

「えっあ、はい！」

はやては言われるままに零児と小牟を倉庫に案内した。

第四章 森羅と時空管理局（後書き）

いかかでしたか。

本当はこの章でバトルに発展しようかと思いましたが字数問題で次の章に持ち越しになりました、すみませんでした。

でてきて欲しい作品があれば感想にお書きください、もし僕にでもわかる作品であれば出して見たいと思います。

次回もお楽しみに。

第五章 エミルダークの目的（前書き）

- ・ エミルダークの目的、それはある物を取り返しにきたのが目的だが
- ・

第五章 エミルダークの目的

ダタタタタ！！！

バギューン！！！！ バギューン！！！！

バコーン！！！！

時空管理局の入り口前でそんな音が聞こえた。

その区域で戦闘を行っているのはなのはとフェイトと同じ時空管理局のメンバー、ティアナとスバルである、しかし今はピンチの状況におちいつている。

ティアナ

「く！ このままじゃ・・・」

スバル

「頑張ってティアナ！ もうすぐ援軍が来るから！」

そしてティアナとスバルと戦っている軍隊はエミルダークである。

兵士A

「隊長、なかなか沈みませんね・・・」

隊長

「ああ、流石は時空管理局の魔道士と言ったとこだな・・・だがもう終わりだ！ 一気に畳み掛けるぞ！！」

全兵士

「「ハ！！！！」」

そういいながら兵士はマシンガンを構えた。

スバルとティアナは体力を極限まで消耗しており動く事もまがならない状態におちいつていた。

隊長

「終わりだ・・・発射準備よーーい!!!!」

スバル

「そんな・・・ここまでなの・・・」

ティアナ

（なのはさん・・・フェイトさん・・・）

もはや絶体絶命の時、ティアナとスバルはもうだめだと思い目をつむった。

しかしその時

兵士B

「隊長!!!!」

隊長

「ええい騒がしい・・・なんだ!!!!」

兵士

「上空に人を確認!!　　しかも二人も!!!!」

隊長

「ふん・・・きたか・・・管理局の白い悪魔!!!」

隊長が上空を見ると光の玉が落ちてきた、その光の玉はか数人の兵士に直撃した。

スバルとティアナも上空を見た。

ティアナ

「あれってもしかして・・・」

スバル

「なのはさんに・・・フェイトさんだ!!!」

そして上空にいたなのはとフェイトは、スバルとティアナのそばに着地した。

なのは

「ティアナちゃん! スバルちゃん! 大丈夫!!!」

フェイト

「もう大丈夫だ・・・後は私達に任せろ!」

ティアナとスバルは安心したせいとそのまま座りこんでしまった。

兵士C

「たっ隊長!!! あれはまさか・・・」

隊長

「ああ・・・確かにあれは管理局の白い悪魔・・・高町なのはだ!」

一部の兵士は唾を飲み、一部の兵士は体を震えていた。

隊長

「だがひるむな！！
を使うぞ！！！！」

援軍が増えたとはいえ二人だ！！

アレ

全兵士

「「ハ！！！！」」

兵士は使っていたマシンガンのマガジンを捨て、色違いのマガジンを取り付けた。

隊長

「撃てーーーー！！！！」

ズタタタタタ！！！！

と音を出し、なのはとフェイトに向かって飛んできた。

なのは

「レイジング・ハート！」

フェイト

「バルディッシュュ！」

二人がガード態勢に入ると目の前に魔法壁が現れた、二人は撃たれた玉をガードしたが異変が起きた。

数秒もたたないうちに魔法壁にひびが入った。

なのは&フェイト

「「っ！！！！」」

そしてパリーン！！！！と音と同時に魔法壁は壊れてしまった。

そして撃たれた玉はなのはの肩に、フェイトは足に当たってしまった。

しかも着ていたバリアジャケットもすり抜けて。

なのは

「うわぁ！！」

フェイト

「くっ！！」

二人が座りこんだその時。

隊長

「今だ！！ 捕獲電磁網装置用意！！！！」

兵士

「ハ！！！！」

兵士がいつの間にか置いてあった装置を作動させた。

すると電磁波がなのは達を取り囲んだ。

なのは

「なに・・・これ・・・」

ティアナ

「くっ・・・」

ティアナは持っていた銃を装置に向けて撃とうとしたが・・・

ティアナ

「う、うわあああ!!!」

ティアナの中になんか強い電撃が走った、そしてしばらくしてやみ、ティアナはその場で倒れた。

スバル

「ティ、ティアナ・・・そんな・・・ティアナ!!!!」

なのは

「ティアナちゃん!!!!」

フェイト

「きさま・・・!!! ティアナに何をした!!!!」

隊長

「ふん、安心しろ、ただ気絶しているだけだ、今はな・・・」

フェイト

「今は・・・だと・・・?」

隊長

「今は100ボルトの電撃だ、次は100万ボルトできさまを殺す、流石の魔道士様も100万ボルトも長時間食らったらさぞかし灰に

なるだろうな・・・」

フェイト

「なっなに!!!」

フェイトは驚きを隠せなかった。

なのは

「何が・・・目的なの・・・」

隊長

「何い？」

なのは

「何が目的なのか聞いているのです。」

隊長

「いいだろう・・・どうせ死ぬのだ・・・教えてやろう、この区域にパラレルストーンと言う特殊な石がある、そいつを返してもらいに来た！」

なのは

「パラレルストーン・・・っ!!!」

なのは気が付いた、ついさっき零児達に見せた光る石がそうでは無いかと気が付いたのだ。

なのは

「それがあれば・・・おとなしく引き上げてくれませんか？」

隊長

「いいだろう・・・あればの話だな・・・」

兵士

「しっかし!!!」

隊長

「いいではないか・・・我々の目的は石を取り返すこと・・・無駄に殺しても意味が無い、それに今知った所でこいつには何もできない・・・さあ、早く渡してもらおうか。」

フェイト

「しかしなのは!」

なのは

「でも、このままだと皆がやられてちゃうよ、悔しいけど今は言うとうりにしないと・・・」

フェイト

「なのは・・・」

スバル

「なのはさん・・・」

なのははポケットの中からパラレルストーンを取り出した。

隊長

「おお・・・確かにその光、我々が求めているパラレルストーンではないか。」

なのは

「これで・・・もう手出ししませんよね・・・」

隊長

「よかろう・・・約束しよう。」

隊長がなのはに近づきパラレルストーンをていとうとした。

???

「渡す必要は無い!」

なのは

「え!」

するとバキュンバキュンバキュン!!
壊された。

と銃声音が聞え装置が破

兵士B

「隊長!!!」

兵士A

「だっ誰だ!!!」

???

「よくやったのう・・・後は任せい!」

なのは

「あなたたちは・・・」

二人の人物がなのは達の前に立った。

フェイト

「有栖さん・・・小牟さん・・・」

そこには金色の銃を持った零児と銀色の銃を持った小牟がいた。

隊長

「きさまらは・・・まさか！」

零児

「俺たちを知っている様子だな。」

兵士B

「隊長・・・あいつらは？」

隊長

「バカモノ！！ この世界の政府特務機関森羅エージェント、有栖零児と小牟だぞ！！！！」

兵士D

「なっ！！ まさか彼らが・・・」

兵士達は警戒した。

小牟

「ほほ～～わしらも有名になったのう！ しかしどうもこいつもわしの好みじゃないの～～・・・」

零児

「選り好みを決めている状況か！！ いくぞ小牟！！」

小牟

「ほいほい、じゃあいくかのう!!!!」

そういつて零児は金色の銃、”金”^{ゴールド}とショットガン、”ハリウッド”^{シルバー}を構え、小牟は銀色の銃、”銀”を構えた。

隊長

「来るぞ!!　よけろ!!!!」

零児

「遅い!!　いくぞ、銃の型!!!!」

隊長は命令したが零児の言うとうり遅かった。

零児は右を、小牟は左、そしてお互い正面に乱れ撃ちをした、しかも全弾命中。

兵士A

「ぐあ!!!!」

兵士C

「うぼお!!!!」

そして数分後、全兵士は零児と小牟により全滅した。

スバル

「あれだけの兵士を・・・たった二人で・・・!!」

なのは

「コレが・・・森羅の力・・・」

なのは達は驚きを隠せなかった。

零児

「おい、大丈夫か？」

なのは

「は、はい、なんとか・・・」

小牟

「おいおい、何が大丈夫じゃ！　傷がすごいことになったぞ！」

フェイト

「大丈夫です、これぐらい・・・ウツ！！！」

フェイトは無理やり立とうと思ったが傷が痛み立てなかった。

なのは

「フェイトちゃん！　ウツ！！！」

小牟

「やれやれ・・・ほれ！！　コレでも食え！！！」

小牟はそう言って4枚の油揚げを取り出した。

フェイト

「これは？」

小牟

「わしが作った超最高傑作の油揚げじゃ！　まあ食うが良い！」

なのは達は不思議そうに油揚げを食べた、するとなのはとフェイトの傷がみるみるうちにふさがったてスバルは体力が完全に回復し、ティアナは食べた瞬間気が付いたのだ。

ティアナ

「あ、あれ？　私一体・・・」

スバル

「ティアナ！！！！」

フェイト

「これは・・・一体・・・」

小牟

「ハハハ！！！！　どうじゃわしの油揚げは！！！！　あの豆よりいいじゃろう！！！！」

零児

「おいお前ら！！　早くしろ！！　敵さんがお怒りだぞ！！！！」

零児の叫びに全人が注目すると、明らかにこちらを睨んでいる隊長がいた。

小牟

「おっとすまんすまん、空気を読んでもらったのう。」

零児

「ティアナとスバルといったな。」

スバル

「は、はい！ スバル・ナカジマです！」

ティアナ

「ティアナ・ランスターです・・・」

零児

「悪いが君たちにも手伝ってもら方がいいかい？」

スバル

「はい！ 喜んで！！！」

ティアナ

「助けてくださった命の恩人です！ 全力で手伝います！」

二人は戦闘態勢に入った。

小牟

「なのはにフェイト！ ぬしらにも手伝ってもらうぞ！！！」

なのは

「でもなにおすれば・・・」

小牟

「ちよいと耳を貸してもらうか？ ゴニョゴニョ・・・」

小牟は全人を集めてひそひそ話をした。

零児

「なるほど・・・小牟にはいい考えだな。」

小牟

「じゃろ〜!!　ホレホレ、もつとわしをほめよお〜、そしてときめけ〜。」

零児

「・・・たまに働いたかと思えばこれか・・・しかもこのセリフ・・・前に言ったような気が・・・」

フェイト

「とにかく小牟さんのゆうとうりにしてみましよう!」

なのは

「うん!　じゃあスバルちゃん、ティアナちゃん!　準備はい?」

ティアナ&スバル

「「はい!!」」

6人は戦闘態勢に入った。

隊長

「まったくいつまで待たせるきだ!!」

零児

「すまない、もういいぞ。」

隊長

「どんな作戦でいくかわからんが・・・とにかくさまらを倒し、そのパラレルストーンは返してもらおうぞ!!」

小牟

「やれるもんならやってみい!! まあてきるのならばのう!!」

そして第六機関と森羅エージェント対エミルダーク隊長による戦いが始まった。

第五章 エミルダークの目的（後書き）

いかがですか？
まいりました。

またまた先のばしになってし
本当に申し訳ございません。

つけ、次の作品に行きたいと思えます。

次からは必ず決着を

ひきつづき出して欲しい作品がありましたら感想の方
にお書きください。
次回もお楽しみ。

第六章 パラレルストーンの力（前書き）

すべてにおいて決着がつくとき、パラレルストーンの力が発動する、
そして・・・

第六章 パラレルストーンの力

隊長

「ふん、やつとか・・・きさまらの作戦で日がくれると思ったぞ・・・」

零児

「すまないな、じゃあさっさと始めるぞ！ スバル！ フェイト！」

フェイト&スバル

「了解！！」

そう言って隊長に突っ込んで行くフェイトとスバルは二手に別れて隊長をはさみうちにした。

隊長

「・・・何のまねだ・・・」

隊長は二人を睨み付ける、しかし二人は屈しなかった。

フェイト

「バルディッシュュ！！」

スバル

「マツハキヤリバー！！」

と言いながらフェイトは杖を、スバルはガントレットを装備した腕を構えた。

すると杖だったのが鎌のように、ガントレットは高速で回転しはじめた。

そして二人は隊長に突っ込んで行った。

フェイト&スバル

「ハアアアア!!」

二人の武器は隊長に当たり砂ぼこりがまった、しかし隊長は二人の攻撃を刀二本で受け止めた。

隊長

「弱いな・・・貴様らそれでも戦士か！」

二人の攻撃をはじきかえした、その時に二人は大きく吹き飛ばされた、しかし・・・

ティアナ

「残念だけど私達魔道士だから、クロスファイアー・・・」

隊長から少し離れた所から拳銃を構えていた、隊長は察知したが隙があり避けることができない。

ティアナ

「シュート!!」

一発の魔法弾が撃たれ、隊長は見事に直撃した・・・が、隊長は全くもって無傷だった。

隊長

「やはり弱いな・・・きさまらそれが本気か？」

隊長はまだまだ余裕な顔をしている。

ティアナ

「嘘！　こいつ本当に人間！？」

ティアナは戸惑っていた、直撃したはずの魔法弾が無傷であれば誰だって戸惑う。

なのは

「レイジングハート！　お願い！！」

なのはは杖を隊長に構えると魔力をチャージしている、どうやらでかい一発をお見舞いするようだ。

隊長

「やらせん！！！！」

さすがに食らえばやばいと感じた隊長は一気になのはに近づいていたが・・・

ガキーン！！！！！！

　　と音がした音の先には隊長とほんのりと刀身が赤い刀、”火燐”
　　（かりん）で隊長の刀を受けとめている零児と仕込み刀、”水燐”
　　（すいれん）で受けとめている小牟がいた。

零児

「悪いなあ・・・そうはさせん！」

小牟

「主の相手はわしらじゃ！ 覚悟せい！！」

隊長

「貴様ら！」

ガキン！！ つと音が鳴り隊長と零児と小牟は後ろに下がった、
するとそこへ・・・

スバル

「リボルバー・・・」

隊長

「なにい！！」

いつの間にか隊長の後ろにいたスバル、腕に装備しているガントレットからカートリッジが排出され・・・

スバル

「ナツクル！！！！」

ローラースケートの勢いで隊長を高速で殴りつけた。

隊長

「ごばあ！！！！」

バキィィ！！！！

つと音と共に隊長は地面に滑りこんだ、なんとか倒れずに態勢を整えた隊長、しかしまだまだ余裕な顔をしながら刀を構えた。

隊長

「なかなかやる・・・だがまだまだだな！」

隊長が後ろ振り向くとスバルの後ろに鎌を構えたフェイトがいたそして・・・

フェイト

「バルディッシュー！」

するとフェイトの体の装備が軽装備になり、代わりに鎌だった杖が大剣にかわっていた。

そして大剣は隊長に向かって振り落とされた。

隊長

「むう！！！」

隊長は二本の刀で受けとめたがさすがに耐えきれないとわかり後ろに下がる。

そして・・・

なのは

「エクセリオン・・・」

なのはの杖の魔力チャージが完了したのだろう、杖は隊長に向けら

れた。

隊長

「しまっ・・・!!!!」

隊長が気が付いたがもう遅い。

なのは

「バスターーー!!!!」

ドキューーン!!!!

っと桜色の特大ビーム抱が撃たれた。

隊長

「ちい!!!!」

隊長は二本の刀でなんとか受けとめた。

なのは

「リリース!!!!」

そうゆうとさらになのはの魔力が増加した。

隊長

「く・・・! クソウ!!!!」

隊長は耐えきれずに飲まれてしまった。

零児

「やったか!?!」

誰もがそう思ったその時、砂ぼこりから一人の影が見えた、それは先ほどビーム抱を受けとめていた隊長の姿である。

ティアナ

「う、うそ・・・」

フェイト

「く・・・! 彼は化け物なねか!?!」

隊長

「まだだ!?!! 　　まだ終らんよ!?!!」

フハハハ!?!!

っと笑いながら刀を構えている隊長、なのはは管理局ではエースオブエースと言われている最強魔法士である、その攻撃も傷だらけとはいえ、耐え切ったのだから正直恐ろしく思えてきている管理局のメンバー達・・・しかしまだ諦めないものもいた。

零児

「よくやったお前たち、後は任せろ! 　　小牟!?!」

小牟

「まかせい!! 　　行くぞおお!!」

森羅のエージェント、有栖零児と小牟であった、いつの間にか隊長の目の前に現れて小牟が手を上げながら妖力をためていると、青いく丸い空間が隊長を閉じ込めた。

隊長

「こ……！　これは……！！！」

隊長は身動きが取れない状態になってしまった。

零児

「火は火を生み！　火は土を生み！　土は金を生む……！」

零児がショットガン、柊樹^{ハリウッド}を撃ち、さらに先ほど使っていた火燐と雷を帯びた刀、地播^{ちらい}で切り、兵士達を全滅させるのに使った金を玉切れになるまで撃ち続けた。

小牟

「そして金は、水を生む……！」

ラストは小牟が飛び込んで仕込み刀、水燐で隊長を高速で斬った。

零児

「真羅……万象……！！！」

っと言って小牟が水燐を鞘にしまうと……

ザン……！！

っと思と同時に隊長の体は見事に斬れ、隊長は吹っ飛ばされていた。

零児

「終わったか・・・」

小牟

「やれやれ・・・やっと終わったのう、よくし！
一緒に勝利のポーズ！！」
それじゃあ

零児

「するか！ それ以前に決めていないだろう！
なかんじの話前にもしたような気がするのだが！」
てゆうかこん

小牟

「そうだった？」

そんな感じに漫才を行うほど余裕だった。

なのは達はそんな二人を見てその場でポカーン・・・と立っていた。

零児

「おい、大丈夫かお前たち？」

零児の呼び掛けにふと我に戻ったなのは達。

なのは

「え！ あっはい！ おかげで助かりました、ありがとうございます
います有栖さん、小牟さん。」

小牟

「いやいや礼をするのはこっちのほうじゃ！」

零児

「ああ、あの時お前たちの協力が無かったらもしかしたら死んでいたかもしれない、だからこちらからも礼を言わせてくれ、ありがとう。」

零児は頭を下げた、つい反応してなのは達も頭を下げた。

小牟

「しかしどうする？　このタフ野郎、このまま逃す訳にはいかんじゃろ？」

小牟は気絶している隊長を見てそう思った。

フェイト

「我々が身柄を確保して事情聴取します、何か分かればすぐに森羅に連絡させていただきます。」

フェイトが今後の事を決めていると・・・

零児

「・・・いや・・・まだ捕獲するのは少し早いようたぞ・・・」

フェイト

「え!？」

なのは達が後ろを見るとそこには先程まで気絶していた隊長が奇妙な笑いと共に立っていた。

隊長

「フフフフ・・・フハハハハ・・・フハハハハ!　　ハーーーーハ

ハハハハ!!!!」

小牟

「たぐう!!　こいつは本気で化け物か!!!!」

全員が戦闘態勢をとっていると・・・

隊長

「パラレルストーンよお!!!!　聞えるのならこやつらにその力をしめすがいい!!!!」

隊長わけのわからない事を言うとき急に四つの黒いホールが現れた、しかもスバルとティアナをのぞく四人がそのホールに巻き込まれそうだった。

小牟

「何じゃこりゃ!!!!」

なのは

「吸い込まれる・・・!!!!　フェイトちゃん!!!!」

フェイト

「な、なのは!!!!」

零児

「貴様・・・何をした!!!!」

隊長

「貴様は永遠に時空の狭間をさ迷うがいい!!!!」

隊長はそう言って両手を上げると吸い込む力が増加して、ついには・

四人

「「「うわああああ!!!!」」」

黒いホールは四人を吸い込まれてしまった。

スバル

「なのはさん!! フェイトさん!! 皆さん!!」

隊長

「我々は撤退する!!」

隊長のまわりに黒いもやがかかっていた。

ティアナ

「まで!! お前だけでも!!」

ティアナは銃を構えたが、時は既に遅し、隊長と四つの黒いホールは完全に消えてしまった。

ティアナ

「そ・・・そんなあ・・・」

ティアナは持っていた銃を落とす。

スバル

「ティ、ティアあ・・・どうしよう、本当にどうしよう!」

スバルは少し泣きそうになった。

ティアナ

「仕方ないわ・・・八神隊長に報告しよう・・・」

ティアナがそうしようとした瞬間、いきなり目の前にバチバチ！！
っと空中で鳴り響いた。

ティアナ

「くそ！！　　こんなときに！！」

スバル

「こうなったら私達だけでも！！！！」

二人が再び戦闘態勢に入ったそしてピカーン！！！！　　っと光りだした、一瞬の出来事なのでスバルもティアナも目をつむってしまった。

そして目を開けるとそこには一人の少女が立っていた。

???

「やっと着いた・・・とにかくここで情報收拾しないと・・・」

ティアナ

「動かないで！！！！」

少女はティアナの声に気が付いた。

???

「まっ待ってください！　　私は敵じゃありません！！」

謎の少女は敵じゃないとしめた。

エミルダーク基地本部

隊長

「今帰った・・・」

兵士

「た、隊長！！
班を！！！」

傷だらけじゃありませんか！！

すぐに救護

隊長

「騒ぐな！　これぐらいでひるんでは我がご先祖に顔向けできん、ところであの四人はどうなった？」

兵士

「は、はい！　あの後四人は各異次元に飛ばされました！
像がこちらに！！」

映

兵士が目の前のスクリーンに映像を映した。

兵士

「小牟は天堺に、高町なのはは幻想堺、フェイト・T・ハラオレンは魔堺へ飛ばされました！」

隊長

「有栖零児はどこに飛ばされた？」

兵士

「それが・・・レーダーで調べてもどこにも一致しません。」

隊長

「・・・フツ、あの男は運が悪い・・・次元の狭間にさ迷っているかあるいはもう一つの世界に行ったんだろう。」

兵士

「もう一つ世界に・・・でありますか？」

隊長

「きさまらにもいづれか話をしよう・・・（しかし本当にもう一つ世界に行ったのなら少しやっかいだな・・・）」

隊長はそのばに離れた、果たしてもう一つの世界とは一体どこだろうか、そして四人の運命はいかに。

第六章 パラレルストーンの力（後書き）

いかがでしたか？

後更新が遅れて申し訳ありませんでした。

今後ともこのような事はできるだ

けしないように努力したいと思います。

質問があります、次の回で誰視点から始めるかアンケートを取りま

す、一番多かったキャラに最初の始点にさせていただきます。

キャラはこちら

零児

もう一つの世界

小牟

天堺

なのは

幻想堺

フェイト

魔界

皆様のご協力よろしくお願ひします。

第七章 復活のソーディアン（前書き）

人格をもつ剣が再び復活した時、異世界からの訪問者が現れ、運命的な出会いに発展する。

第七章 復活のソーディアン

広い街並みにいろんな建物、さらにはお城が建っていた城下町がある。

その名はセインガルド。

そこに一人の青年が立っていた。

???

「久しぶりだな・・・セインガルド！」

青年は懐かしく町並みを見ていた。

青年の名前はスタン・エルロン、金髪の長髪で鎧を身にまとっていた。

スタン

「しかし王様一体何のようだろう？」

どうやらスタンはセインガルドの王様に呼ばれているようだ。

スタン

「とにかくセインガルド城に行こう！」

スタンはセインガルド城に足を急がせた。

セインガルド城中

スタン

「失礼します！　王様！」

スタンは城中の王様の間に入った

王様

「おお！　スタン・エルロン！　久しぶりじゃのう。」

スタン

「はい！　王様もお元気で！」

スタンがなぜセインガルドの王様と話ができるか、それは彼が世界を救った英雄だからである。

スタン

「ところで王様、俺に何かご用ですか？」

王様

「ふむ・・・じつはのう・・・」

王様はスタンに説明した、どうやらセインガルドをでて東の方向に森があり、そこに妙な光がかがやいている、セインガルド兵士が調査をしているのだから入ってすぐに森の出口に出てしまうのだ、そこでスタンに調査を依頼したらしいそうだ。

スタン

「わかりました！　　すぐに調査してきます。」

王様

「すまない、頼んだぞ。」

スタンはセインガルドを出て東の森の前に着いた。

兵士

「あ！　　スタン様！　　お疲れ様です！」

スタン

「うん、ありがとう、しかし何だろう？　　あの光・・・」

森の中には鈍い光が輝いている。

兵士

「わかりません、ただ我々が入るとすぐに森の出口に出て行くのです。」

スタン

「なるほど・・・わかった、すぐに行ってくるよ！」

兵士

「はい！　　お気をつけて！」

兵士が敬礼しながらスタンを見送った。

スタンは森の中に入っていった。

新米兵士

「しかし大丈夫でありますか？　我々でも戻されるのに・・・」

新米兵士が心配をしていると・・・

兵士

「お前、スタン・エルロン様を知らないのか？」

新米兵士

「スタン・エルロン？　確かベルクラントから世界を救った・・・あ！　まさかあの人が！！」

そう、スタン・エルロンはベルクラントと言う世界の恐怖から世界を救った英雄である、なので王様がスタンを雇ったのにも意味がわかる。

森の中

スタン

「意外と深いな・・・」

どうやらスタンは森の出口にすぐに行かず、ちゃんと中に行けたらしい。

スタン

「なあディムロス、何かわからないか・・・ってそうか、ディムロスはいいいな・・・」

スタンはある人物の名を口に出す。

ディムロス

かつてスタンが扱っていた剣の名前だ、飛行竜に密告中に見つけた剣である、しかしただの剣ではない。

人格をもつ剣である。

それは使い手でしか聞こえず、使い手には詠昌術を身に付けることができる。

しかしディムロスはベルクラントの事件で自らを犠牲にして失ってしまった。

スタン

「今ごろディムロス、何してるかな・・・」

スタンは今持っている剣、ロイヤルブレードを鞘から取り出し、ディムロスを懐かしながら見ていた。

すると向こうの方で何かが光っていた。

スタン

「何だろうあの光？ とにかく行ってみよう！」

スタンは光が指す道の方に走っていった、途中モンスターに襲われたが得意の剣術で余裕でとうりぬけた、そしてスタンはついに光が指す所までたどり着いた。

光の正体は真っ赤に光る一本の剣だった、その剣は地面に刺さって

いる。

スタン

「この剣・・・どこかで見たことあるぞ・・・まるでデймロス・・・」

デймロスと名を出そうと思ったとき、さらに真っ赤に光った。

スタン

「うわ!!」

スタンはあまりの眩しさに目を閉じてしまった、そして再び目を開けると・・・

スタン

「デйм・・・ロス!？」

そう、そこにはスタンがかつて扱っていた愛剣、デймロスの姿があった。

デймロス

『ここは・・・どこだ?』

デймロスが目を覚ましたそうだ。

スタン

「デймロス!!!!」

スタンが自分の愛剣の名を叫んだ。

ディムロス

『その声はスタン？ スタンなのか!!!』

ディムロスが自分のマスターを確認した。

スタン

「ディムロス、一体どうやって生き返ったんだ！」

ディムロス

『わからぬ・・・我も気付けばここにいたのだが・・・』

どうやらディムロスもどうして自分がここにいるのかわからないそうだ。

スタン

「でもよかった・・・また会えて嬉しいよディムロス!!」

ディムロス

『ふん、少しは強くなったのかスタン?』

スタン

「ああ！ だから・・・また俺のマスターになってくれないか？」

ディムロス

『仕方ないなあ、ではスタン！ 再び貴様はソーディアンマスターとして支えよう!!!』

スタン

「ありがとうディムロス!! これでまた戦えるぜ!!」

スタンは刺さっているデймロスを抜き、天に掲げた。

スタンはソーディアン、デймロスを手に入れたのだ。

しかし・・・

デймロス

『気を付けろスタン！！ 何か来るぞ！！』

スタン

「この黒い渦は・・・まさかゆがみ！！！！」

デймロス

『馬鹿な！！ ゆがみは完全に封印したはずだ！！ なのになぜ！？』

スタンとデймロスは警戒していた。

しかし予想もつかないことが起こった、黒い渦から一人の女性が出てきた。

スタン

「女の人！？」

スタンは倒れている女性に近づいた、オレンジ色の髪をくくっている女性が倒れている、そして傍らには小さな赤い玉が落ちている。

デймロス

『スタン！ 警戒を怠るなよ！！』

スタン

「う、うん、あの！　大丈夫ですか？」

????

「ん・・・んん・・・」

女性が目を覚ました、そしてゆっくりと体を起こした。

????

「ここ・・・は？」

女性はいまいち状況が把握できていないそうだ。

スタン

「よかった、気が付いたんですね！」

????

「あの・・・あなたは？」

スタン

「俺はスタン・エルロンって言います。」

なのは

「私は高町なのと言います、すみませんがここはどこですか？」

スタン

「ここはセインガルドの東にある森の中です。」

なのは

「森の中・・・あ！」

なのはある事を思い出す。

なのは

「フェイトちゃん・・・有栖さん！　小牟さん！」

なのはは突然立ち名前を出した人達を探している。

スタン

「有栖！　小牟！？」

スタンはある人の名前には聞き覚えがあった。

スタン

「すみません！　今有栖さんって！　小牟さんって言いましたよね！？」

なのは

「は、はい、言いましたけど・・・？」

なのはは少し戸惑った。

スタン

「もしかしてあなたは・・・」

スタンが話そうとした時に、なのはの後ろにいる機械みたいなやつがなのはを捕らえようとしていた。

スタン

「危ない！！！」

なのは

「きゃあ！！！！」

スタンが身をとうしてなのはをかばってなんとか捕まらずに助かった、

ズササー！ っと地面に滑り込み、なんとか助かった。

スタン

「なっ、何だこいつ！」

スタンが立ち上がりディムロスを構える。

なのは

「あれはガジェット！？」

スタン

「ガガ、ガジェット??」

スタンは初めて聞く言葉に戸惑っているがなのはは驚きで言葉が出なかった。

しかもいつの間にか2、3体増えていた。

スタン

「くそ！ あなたは逃げてください！ ここは俺が！！！」

なのは

「いえ・・・私も戦います！」

なのはは赤い玉を天に掲げた、するとなのはの姿は先程の制服姿では無く、白いジャケツトを羽織った姿に変身した。

スタン

「変身した！？ 一体あなたは・・・」

なのは

「話は後で！ とりあえず手伝います！！」

スタン

「わかりました、ようし！ 行くぞディムロス！！」

ディムロス

『ああ！ 我とお前の実力をあの訳のわからぬ輩に見せつけようじゃないか！』

そしてなのはにとっては初めての場所、スタンにとっては初めての敵との戦いがいま始まった。

これが運命的なできことに発展するのも知らずに・・・

第七章 復活のソーディアン（後書き）

いかがでしたか？ アンケートがなかなか集まらない（一人い
ましたが）のでこちらで決めることにしました。順番的に、なのは、
フェイト、小牟、そして零児という形で物語を進めて行きたいと思
います。 言い忘れていましたが今回は字数が若干なめです。

次回からは気を付けます。それでは次回もお楽しみ！

第八章

謎の敵ガジェットVS

魔術士&ソーディアンマスター（前書き）

お互いの力が敵と対峙する、それは勝利の力か、それとも敗北の無謀か。

第八章 謎の敵ガジェットVS 魔術士&ソーディアンマスター

スタン

「デймロス！ あの前についてわからないか？」

デймロス

『わかるか！！ あんな機械天地戦争時代には無かったぞ！！』

スタン

「や、やっぱり？」

ガジェットと応戦しながらデймロスに問い掛ける。

なのは

（あの人さっきから独り言を言っているけど・・・まさか？）

なのははある可能性を感じていた。

デймロス

『今は全滅することだけをかんがえろスタン！』

スタン

「わかってるよ・・・行くぞ！！」

そう言ってガジェットに突っ込んで行った。

なのは

「だ、駄目です！ ガジェットは！」

なのはが急いでスタンを止めようとしたが遅かった。

が、なのはは信じられない出来事が起こった。

スタン

「虎牙破斬!!」

スタンの得意剣術を放つと、なんとガジェットが上下に真っ二つに斬られて爆発した。

なのは

「なっ!!!!」

あり得ない出来事なのはは驚愕した。

スタン

「次だ!!」

スタンはどんどんとガジェットをなぎ倒していく、しかしいくら切っても増えるばかりだった。

スタン

「くそ! キリがない!!」

ディムロス

『距離をとって態勢を立て直せスタン!!』

スタンが後方へ避けると。

なのは

「レイジnkハート!! お願い!!」

レイジnkハート

『はい、マスター』

なのはが杖、レイジnkハートをガジェットに向ける、そして・・・

なのは

「アクセルシューター！」

なのはのまわりに桜色の小さな魔力弾が現れた。

スタン

「えっ!?!」

スタンは見たこともない詠唱術に戸惑った。

なのは

「シューート!!」

そして桜色の魔力弾はガジェットに命中してガジェットに穴があき

バコオオオオオン!!!!

爆発して過半数が全滅した。

スタン

「すっげえ・・・なら俺も!!」

対抗心を燃やしたのか、スタンは再びガジェットに突っ込んでいく

と思ったら、急に飛び上がり・・・

スタン

「烈空斬!!」

体を回転させ空中で回転切りをお見舞いした。

ズバン!ズバン!!ズバン!!!

ガジェットに大きな切り口があきそして

バコオオオオオン!!!

コレも見事に破壊した。

スタン

「飛燕連脚!!」

さらにスタンはガジェットに近づき空中で二回蹴り技を決め、止めにガジェットの真ん中にディムロスをさして破壊した。

なのは

(すごい・・・あの人がジェット相手にここまで戦えるなんて・・・!)

なのはは今だに驚愕していた、ガジェットは魔道士でしか思うようにダメージが当たらない、ゆえにスタンはただの剣士、普通なら直撃してもかすり傷程度の威力だ、しかしスタンはガジェットを真っ二つに斬ったりできるのは正直おかしいのである。

スタンは最後の一体を切り下ろし、戦闘は終了した。

スタン

「よっしゃ！ 勝ったぜ！！」

スタンはディムロスを天に掲げた。

なのは

「あの！ すみません！」

スタン

「んっ？」

スタンはなのはの呼び掛けにきずきなのはの方に振り向いた。

なのは

「あの・・・もしかしてあなたは・・・魔道騎士ですか？」

スタン

「まどうきし？ 確かに魔法は使えるけど騎士じゃないよ？」

なのは

「えっ！？」

スタンの答えになのははびっくりした。

なのは

「で、でもその剣はいい・・・」

なのははスタンの持っている剣に疑問を感じた。

スタン

「ああ、これはデймロスって言う俺の愛剣だ、変わった剣だろ？」

デймロス

『我を珍品みたいな言い方をするな!!』

スタンの説明にデймロスがツツコミを入れた。

なのは

「聞こえる・・・やっぱり聞こえるよ。」

スタン

「へっ？　なにが？」

スタンは気になっていた。

なのは

「あなたの剣から声が聞こえます。」

スタン&デймロス

「『なっ！　なんだってえ（だと）!!』」

スタンとデймロスはなのはの一言に驚きを隠せなかった。

スタン

「なっ！　えっ！　いつ、一体どう言う事だ!!?」

なのは

「だからその剣から声が聞こえるのです、だからデバイスでは無いか

なって・・・」

スタン

「で、でばいす?？」

スタンが聞いたことのない単語に首を傾げていると・・・

ディムロス

『おいその女! 我の声が聞えるのか?』

ディムロスがなのはに質問した。

なのは

「はい、十分に聞こえます!」

ディムロス

『なんと!!』

スタン

「なあディムロス、もしかしたらこの人もソーディアンマスターじゃないか?」

ディムロス

『まさか! しかしソーディアンマスターは全人そろっているぞ!』

スタン

「だよなあ・・・じゃあ彼女は一体・・・」

スタンとディムロスが悩んでいるとき。

なのは

「あの、すみません、そーでいあんますたーって何ですか？」

スタン

「えー・・・と、ソーディアンマスターってのはね・・・」

スタンがソーディアンマスターについて説明した。

ソーディアンマスターとは、簡単に説明するとソーディアンの使い手で使い手には詠唱術を使う事ができる、さらにマスターはソーディアンの声が聞こえるのである、しかしソーディアンマスター以外はソーディアンの声が聞こえないので本来ならなのはも聞えないはず、だが現に聞えているのはかわりがないのだ。

なのは

「なるほど・・・わかりました。」

スタン

「けど不思議だよな・・・何でディムロスの声が聞こえるんだろう？」

なのは

「私もよく・・・」

スタンとなのはが首を傾げていると。

スタン

「そういや、でばいすってなんだ？」

なのは

「デバイスと言うのは・・・」

スタンがデバイスについて質問した、なのははそれについて答えた。

デバイスとはなのは含む時空管理局の人間が扱う武器みたいな物で主に魔術士が扱っている、デバイスにはそれぞれミッド式とベルカ式があり使い手によっては様々な武器に変形したり装備する事ができる。

なのは

「以上がデバイスについての説明です。」

スタン

「んゝ・・・よくわからないけどキミがソーディアンマスターじゃ無くて魔術士っていうのがよくわかったよ。」

なのは

「はい、私もあなたが魔法騎士じゃ無くてソーディアンマスターとというのがわかりました。」

スタンとなのははお互いを理解した。

すると・・・

兵士A

「スタン様!!」

兵士が数名駆け寄ってきた、しかし途中で武器を構えて警戒した、

なぜならなのはがいるからだ、森の奥になのはがいるのだから誰だ
って警戒はする。

スタン

「待ってくれ！ この人は怪しい人じゃないよ、襲われたところ
を助けただけだよ。」

スタンの一言に兵士たちの警戒はすぐに解かれた。

スタン

「悪いけどセインガルド王国と一緒に来てくれないか？ 一様事
情聴取したいからさ、それに聞きたい事もあるしさ。」

なのは

「私も気になる事があります、セインガルド王国に行けばなにかわ
かるのなら一緒に行きます。」

スタン

「ありがとうございます！ それじゃあ行こう・・・ってそーいやちゃんと
した自己紹介がまだだったな、俺はスタン！ スタン・エルロン
！ よろしく！」

なのは

「私は高町なのはって言います、なのはと呼んでください。」

スタン

「ああ！ それじゃあ行こうなのは！！」

なのは

「はい！」

こうしてスタンとなのはは森をあとした。

果たしてなのはの運命はどうなるのか、そして三人の運命は、四人達はまだ何もわからないか。

第八章 謎の敵ガジェットVS 魔術士&ソーディアンマスター（後書き）

いかがでしたか？

今回も少なめです、質問、また

は感想などありましたら送ってください。

次回もお楽

しみ！

第九章 天堺って名前からして死亡フラグ立っているよね（前書き）

まず始めに皆様に謝罪があります。第九章は天堺と鍵を持つ少年として公開していましたがキングダムハーツが著作権に引っ掛かるとして、急遽、第九章を削除して新たな第九章に変更しました。皆様にはご迷惑をおかけした事を謝罪させていただきます。本当に申し訳ありません。そして、コレを報告してくださった123さん、この場を借りてお礼をさせていただきます。本当にありがとうございます。これからもうこういう事には気をつけて皆様に楽しめるような小説にしていきたいと思えますこれからも応援よろしくお願いします。

第九章 天堺って名前からして死亡フラグ立っているよね

目が覚めるとそこは天井だった。

小牟

「ん、んゝ・・・」

ここはどこじゃ？

確かわしは・・・

小牟がゆっくり体を起こすと同時に扉が開き一人の女性が入ってきた。

???

「目が覚めましたか、小牟さん。」

小牟

「おお！

ワルキューレ！

ワルキューレではないか！」

女性の名前はワルキューレと言うらしい。

小牟

「久しぶりじゃのうワルキューレ！」

ワルキューレ

「本当にお久しぶりです、小牟さん。」

小牟

「主がいる！この景色・・・まさかここは天堺か？」

小牟は辺りを見渡した、そこには明らかに古代ローマをかたどった部屋である。

ワルキューレ

「はい、ここは確かに天堺です。」

小牟

「やっぱり！　くそうあのばかやろうめ！　見つけたらただじやすまさんぞ！」

小牟が腕をバシバシ叩いていた。

ワルキューレ

「小牟さん、一体何があったのですか？」

小牟

「ん？　簡単に言うんじゃのう・・・」

小牟は先ほどまでの出来事を説明した。

続ゆらぎのこと、パラレルストーンのことを。

ワルキューレ

「なるほど・・・そんな事が・・・」

小牟

「ワルキューレよ、いまお前の世界では何が出来事は無いのかの？　続ゆらぎの事があるから心配なんじゃが・・・」

ワルキューレは少し黙り込んだ。

ワルキューレ

「実は・・・最近魔界のモンスターが凶暴化していて・・・天堺の住人が被害にあっているのです。」

小牟

「やはりか・・・困ったもんじゃな・・・」

小牟とワルキューレは黙り込み、しばらく重たい空気が流れこんだ。

小牟

「っ！！？」

小牟が何か察知したそうだ。

ワルキューレ

「ど、どうかなさいましたか、小牟さん？」

小牟

「この感覚・・・間違いない！　　続ゆらぎじゃ！！」

ワルキューレ

「また、ですか！？」

小牟

「ついてくるがいいワルキューレよ！　　油断するなよ！！」

ワルキューレ

「はい！」

小牟とワルキューレは部屋を後にし、続ゆらぎの方に走って行った。

中庭

中庭の中心に黒いもやがかかっていた。

小牟

「こいつか・・・」

小牟

「ええ・・・そのようですね・・・」

小牟とワルキューレは息をととのえながら武器を構えた、続ゆらぎが出現したと言う事は先ほどワルキューレが言った魔界のモンスターへの恐れがあるからである。

しばらくして続ゆらぎがやみ一人の男がその場で倒れている。

小牟

「なんじゃ？ 人間じゃないか？」

???

「いつつ・・・んだここはあ・・・」

男が目を覚まし起き上がった、銀髪の天然パーマでだらしく着こなした着物と死んだような魚の目した男だった、腰には木刀をかざしている。

???

「ん？ お前ら誰？」

小牟

「人が名乗る前に、まず自分から名乗ったらどうじゃ？」

質問を質問で返されて男はめんどくさそうに頭をポリポリとかきながら名乗った。

銀時

「坂田銀時だ、銀さんって読んでも構わねえぜ。」

小牟

「わしは小牟じゃ！ よろしく。」

ワルキューレ

「ワルキューレと申します。」

全人が自己紹介をした。

銀時

「んで小牟さんよお・・・ここはあどこなんだ？」

小牟

「ん？ ここは天塚じゃ。」

銀時

「・・・はあ????」

銀時は意味がわからずにいた。

ここどこ十天堺Ⅱはあ????

確かに普通ならそうなる、しかし銀時は冷や汗をかきながらさらに質問した。

銀時

「え? んじゃあれか!? ここは天国って言うのか。」

ワルキューレ

「少し違いますが確かに天国の一部です。」

っと答えた瞬間、銀時の冷や汗は気持ちが悪いくらいまでかき・・・

銀時

「え!?!? ちょ!?!? うそうそうそうそ!?!!

絶対に

ウソ!?!? てかそんなありえないから!?!? てか銀さん

認めません!?!!

後ろを向き頭をかきむしりながら叫んだ。

小牟

「ええい!! おちつかんか天然パーマ!!」

小牟がどなるも・・・

銀時

「落ち着けるかボケ!!! 散歩してたらいきなり目の前に黒いもやがかかってきて気が付いたらここは天堺で天国ですだあ!?!? ふざけんじゃねーよ!?!! 何勝手に殺してくれてんの!?!?

何これ？ 何かの陰謀！！？」

一向に落ち着かない銀時をみてイライラしていたのか、小牟が手に妖力を集中させ・・・

小牟

「白虎抱！！」

小牟は衝撃破を放った。

銀時

「ぶふう！！！！」

銀時はかなり遠くまで吹き飛ばされた。

そして小牟ワルキューレが銀時の元につくと同時に・・・

銀時

「てんめえいきなりなにしゃがんだ！！ 殺すきかこのちびすけが！！」

小牟

「お前が落ちつかんだだけじゃろがいこの死体魚瞳が！！」

いつしかコレが口喧嘩になった。

それに呆れたワルキューレは静かに・・・

ワルキューレ

「あの・・・小牟さん、銀時さん・・・」

小牟＆銀時

「あゝあ!!」

両方ワルキューレを見た最初はいかつい顔だったがそれは急に引きつった顔になった。

ワルキューレ

「このまま口喧嘩が進むと話がつかないの・・・そろそろ落ち着きませんか??」

本人は笑っているがその後ろで黒いオーラを放っていた、流石にコレには逆らえず・・・

小牟＆銀時

「・・・すみませんでした・・・」

そのばで土下座をしてしまった。

しかしその時。

小牟

「っ!! 気を付けろ!! 何か来るぞ!!」

小牟が再び何かを察知した、そこには続ゆらぎがかかっていた。

銀時

「こいつぁ・・・さっき俺が見た・・・」

そして続ゆらぎが治まった瞬間、体が赤く、悪魔のような翼が生え

た化け物が数体出てきた。

???

「クロス・・・クロス！」

ワルキューレ

「レッドアリーマ！」

小牟

「馬鹿な！ 魔界村はあの時の戦いで全滅したはずじゃぞ！」

そう、魔界村は数年前の戦いで魔界村は崩壊した、なので魔界村の住人であるレッドアリーマが存在しているのはおかしい話である。

レッドアリーマ

「シャアー！！」

レッドアリーマ達はすでに戦闘態勢に入っていた。

小牟

「銀時とかいったな・・・主は下がっておれ、ここはわしらだけでやる！」

小牟とワルキューレも戦闘態勢に入っていた。

しかし・・・

銀時

「おいおいふざけんじゃねーよ、いきなりここに飛ばされて来ては今度は魔界村?? 　なんじゃそりゃよお・・・」

銀時は再びめんどくさそうに頭をポリポリとかきながら言った。

銀時

「おい！　この建物の住人はあんたか？」

ワルキューレ

「えっ！」

ワルキューレは銀時の瞳を見た、そこには先ほどまでの死んだような魚の目が決意に満ちた瞳にかわっていたように見えた。

ワルキューレ

「いっ一樣私ではありますが・・・」

銀時

「んじゃこの住人に言っておけ。」

銀時は腰に差してあった木刀を抜き、レッドアリーマにゆっくりと近づいていった。

レッドアリーマ

「シネエエエエ！！」

レッドアリーマが銀時に突っ込んで行った、しかし銀時は体を反らしレッドアリーマの攻撃をするりとかわした、そして・・・

銀時

「後で報酬金、ガッツリいただくからなあってな！！！」

ズバン!!!!

レッドアリーマ

「グエエ!!!!」

銀時は木刀を大きく横に薙倒し、レッドアリーマは大きく吹っ飛ばされた、そして柱にぶつかりレッドアリーマはそのまま倒れこんだ。

ワルキューレ

「レッドアリーマを・・・一撃で・・・!!!!」

目の前の出来事にワルキューレは驚愕した。

小牟

「フッハッハッハ！ お主なかなか面白い奴じやのう！

何も

んじゃ？」

小牟は笑いながらこう言った。

銀時

「俺は銀時、万事屋銀ちゃん！
ノヤロウ!!!!」

坂田銀時だ！

覚えときなコ

銀時は木刀を肩に乗せて言った。

第九章 天堺って名前からして死亡フラグ立っているよね（後書き）

天堺に銀髪の男があらわれしてき、崩壊した魔界の住人が復活する。
（↑本来前書きに描こうと思いましたが謝罪文で埋まり後書きにな
ってしまいました。次回もお楽しみに！）

第十章 でかいからってロボットだと思わない事だ（前書き）

魔界の住人達の乱戦、しかしそこには新たなる敵が潜んでいたのだ
った。

第十章　でかいからってロボットだと思わない事だ

レッドアリーマー

「コロス!!」

レッドアリーマーの数人が小牟を囲んだ。

小牟

「ワシを殺す?　主にはできないかも知れない。」

とおちよくりながら銀でレッドアリーマー達を確実に撃ち続ける。

小牟

「そんじゃ斬っちゃる!!」

そして残りの一体を仕込み刀、水憐で切り刻んだ。

ザンザンザンッザン!!!!

つと音と同時に。

ワルキューレは得意の剣術でレッドアリーマー達を切っていった、しかし数が数なのでワルキューレはレッドアリーマー達に囲まれていた。

ワルキューレ

「・・・ならばこれで!　竜巻の術!!」

ブホオオオオ・・・

ワルキューレは天に剣をかざすとワルキューレの周りから竜巻が巻き起こり周りのレッドアーマー達を空中に吹き飛ばした。

一方銀時は・・・

バキ！ ズカ！！ バコオオオン！！！！

銀時

「はiiiiiiii！！ 次iiiiiiii！！！！」

ズバ！ ボカ！！ ドガアアアアン！！！！

見てのとうりレッドアーマー達は銀時のメチャクチャな剣術で飛ばかれていき、過半数は吹っ飛ばされていった。

そしてすべてのレッドアーマー達は三人の手に全滅した。

ワルキューレ

「これで全部ですね。」

ワルキューレは剣を鞘に戻した。

銀時

「全くよお・・・冗談じゃねえぞコノヤロウオ・・・」

銀時は木刀を腰に差した。

小牟

「・・・・・・・・」

ただ小牟だけが険しい顔をしながら武器をしまわなかった。

銀時

「ん？　　どうした小牟？　　ウン・・・」

つと言い掛けたところで小牟の顔面パンチが銀時の顔面にクリティカルヒットした。

銀時

「ぶほお！！！」

銀時は地面を滑っていった。

ワルキューレ

「ぎ、銀時さん！？　　大丈夫ですか！？」

銀時

「ぎいやああああ！！　　鼻が！！　　鼻がああああ！！！」

銀時はかなりもがいていた。

そして立ち上がり。

銀時

「てんめ！！　　なにしやがんだ！！　　鼻が折れそうになっちゃまったじゃねーか！！！！　　慰謝料払え慰謝料！！！！」

銀時は小牟におもいつきり怒鳴った。

小牟

「うるさい!!
るぞ!!!!」

今はそれどころじゃないをじゃ!!

また来

つと小牟は顔を赤らめながらいった。

小牟の聞いた言葉どうり再び続ゆらぎが発生した。

ワルキューレ

「また!!」

銀時

「たくっ!!」

しつけえなあオイ!!」

銀時とワルキューレは再び武器を構えた。

続ゆらぎは収まり出てきたのは・・・

????

「ん・・・ここはどこだ・・・」

顔は見えないがほぼ全身鎧をつけていて、腰には剣とマシンガンを
装備している男たちが五人ぐらいいた。

ザフト兵A

「こちらザフト!

応答願います、応答を!」

ザフトB

「ダメです!

通信使えません!」

ザフトと言う軍人と思われる、人達は銀時達の姿を確認した後、腰にあるマシンガンを取り出し銀時達に銃口をむけた。

ザフトC

「貴様ら！　ここがどこか言え！！　さもなくばここで抹殺する！！」

銀時

「はあ！？　俺だって知りてえよ馬鹿が！　いきなり出てきてなにいつてんの？　殺すよコノヤロウ！！　つーかなにそれ？　コスプレ？？」

ザフトD

「何だと！！」

ガチャ！！

つと音がなり再びザフト軍は銃口を銀時達に合わせる。

ザフトE

「ナチュラルの分際で！！」

小牟

「ナチュラル？　天然？？　何をいつとるんだお主ら？　わしらは天然じゃ無いぞ？？」

小牟は首をかしげた。

ザフトA

「ナチュラルもしらぬ愚か者とは！」

ザフトC

「我らコーディネーターのために死ぬがいい・・・ナチュラル共！」

銀時達は戦闘態勢に入った。

が、その時

小牟

「・・・っ!!　　なに!!　　またじゃと!!」

銀時

「おいおいしつこくねーか!!」

再び続ゆらぎが銀時達の目の前に姿を表した。

ザフトE

「な、なんだこれは!!」

さすがのザフト軍もコレには驚き、ザフト軍の警戒はさらに強くなる。

そして続ゆらぎがおさまり出てきたのは・・・

????

「ここは・・・どこだ・・・??」

出てきたのはザフト軍とは違い白と青の鎧をまとい、顔ははっきりと見えているが額にV字型の飾りをつけている少年の姿があった、

手には赤い盾とライフルと思われる物を装備している。

ワルキューレ

「ザフト軍に似たような少年が出てきました・・・」

ワルキューレは少し驚いていた。

ザフトD

「貴様！ ストライク！！」

???

「っ！！ ザフトMSモビルスーツジンだと！！」

少年はどうやらすべてを知っているようだ。

キラ

「こちらX-105、ストライク、キラ・ヤマトです、アークエンジェル！ 応答をお願いします。」

しかしアークエンジェルからの応答は無かった。

キラ

「クソ！！ こんな時に！！」

キラは銀時達の方に顔を合わせた。

キラ

「（民間人！？ まずい！！）こちら地球軍、アークエンジェル所属、キラ・ヤマトです！ 僕がおとりになりますのでそのうちに避難してください！」

キラは銀時達に避難命令をしたが・・・

銀時

「おい坊主・・・避難だあ?? お前1人置いて引き下がるわけないだろ?」

銀時達は避難に応じず戦闘態勢に入っていた。

キラ

「何言ってるんですか!! MS無しでジン相手にできるわけ・・・!!」

小牟

「主よ、キラとか言ったな?? わしらはそんな淡い鍛え方はしとらんよ!」

銀時

「つー訳だ! 覚悟しやがれゴラ!!!!」

銀時がザフト軍に向かって突撃した。

ザフトC

「馬鹿め! 死ねえ!!!」

キラ

「止めろおおお!!」

キラが止めにいくが時はすでに遅し、弾は銀時に向かって撃たれた。

銀時

「おらおらおらおらおらおらああああ!!!」

キラ

「っ!!!」

キラにとって信じられない事が起こった、なんと銀時はマシンガン
の弾をすべて弾き返した。

ザフトA

「なったんだこいつは!!!」

本当にナチュラルか!?!」

全員が弾切れをおこし、リロードしようとしたが・・・

銀時

「おせーよコノヤロウ!!!」

バキ!!!!

ザフトC

「ぐあ!!!」

銀時がザフトに向かって木刀をおもいきり振ったのでザフト兵は
吹っ飛ばされた。

小牟

「今じゃワルキューレ!!!!」

ワルキューレ

「はい!!!」

キラ

「な！ 貴方たちまで！？」

さらに小牟とワルキューレが出てきてザフト兵に向かって行った。

小牟

「くらえ朱雀刀！！」

小牟が水憐から剣圧を飛ばしザフト兵に命中させた。

ザフトD

「ぐは！！」

ザフトE

「うぐ！！」

ザフト兵は剣圧に負け倒れた。

ワルキューレ

「分身の術！」

ワルキューレが天に剣をかざすと今度は地面の下から小さなワルキューレがいきよいよくでてきた。

ザフトB

「な、なんだ！！ ぐあ！！！！」

不意にも分身に当たり上に吹っ飛ばされた。

キラ

（す、すごい・・・MS無しでジンを・・・いったいなにものなんだ彼らは！）

銀時達の戦いにキラは開いた口がふさがらなかった。

ザフトA

「ええい！！　ならばストライクだけでも！！！！」

銀時

「おい！　そっち行つたぞ！」

キラ

「えっ！！」

キラが気付いたその時にはもうザフト兵が目の前に来ていた。

キラ

「っ！！　く、来るなああ！！！！」

キラは背中からビーム型の剣、^{ビームサーベル}を取り出し、そしてザフト兵を叩き斬った。

ザフトA

「ぐあああああ！！！！」

バコオオオオン！！！！

小牟

「なっ！！！！」

小牟達に信じられない出来事が起きた、なんとキラが斬ったジんが

爆発を起こしたのだ。

ザフトB

「我らザフトに・・・」

ワルキューレ

「っ!!」

ザフト兵が何かつぶやいていた。

ザフトB

「我らザフトに!!」

栄光あれええええ!!!!」

キラ

「皆さん! 離れてください! そいつら、自爆するつもりです!!」

ワルキューレ

「じ、自爆!!」

銀時

「ちい!!」

銀時達はジンから離れた、すると本当にザフト兵は自爆してしまった。

バコオン!!!!

バコオオン!!!!

バコオオオン!!!!

そして爆発の後にはなんと跡形もなく消えていた。

ワルキューレ

「これは・・・一体・・・」

小牟

「どういう訳か説明してもらうかの・・・キラよ。」

キラ

「わかり・・・ました・・・」

キラは少し戸惑ったが状況を説明した。

彼らはザフトと言う軍事国家でMSを使い地球にいる人間、^〴ナチユラル^〵を征服するために戦っている、それに対抗すべく、地球軍のパイロット、キラ・ヤマトはMS通称^〴ガンダム^〵を使って対抗しているわけだった。

小牟

「なるほどのう・・・そんでその鎧見たいな格好がガンダムという訳じゃな。」

キラ

「正式にはX-105、ストライクガンダムって言います。」

銀時

「ふーん・・・んで、なんであいつら爆発したんだ？」

キラ

「MSは人間と一色体で戦うために、人間でいう心臓をやられると

爆発する仕組みとなっているのです。」

ワルキューレ

「そんな・・・そんな事って・・・」

しばらく重たい空気が流れた。

するとその時・・・

???

「話はすべて聞かせていただきました。」

小牟

「ん？ この声は・・・」

すると目の前に一人の女性が立っていた。

ワルキューレ

「イシター様!!」

キラ

「いしたー・・・??」

銀時

「な、なんて？ 石田?」

銀時とキラは誰だかわからなかった。

イシター

「あなた方に話があります・・・ついてきてください。」

っと言ってそのまま中に入っていった。

ワルキューレ

「皆さん・・・イシター様についてきてください、こっちです。」

キラ

「ちょ、ちょっと待ってください！ 何者何ですか彼女は!？」

小牟

「ああ、女神イシターって言うじゃよ、彼女は。」

銀時&キラ

「女神だあ(だって)!!?」

銀時とキラは明らかあり得ない言葉に固まってしまった。

小牟

「ほれほれ! 固まっくらんて、行くぞ!」

結局小牟に引っ張られ連れて行かされた。

女神イシターの伝えたい事とは、そして現れた侍とパイロット、この先なにが起こる事など四人は何も知らない・・・

第十章　でかいからってロボットだと思わない事だ（後書き）

いかがでしたか？ ついにガンダムSEEDのキャラが登場しました。キーワードにも書いてあるとおりガンダムSEEDは作者のオリジナルのために少々違和感を感じるかも知れません。でも皆様にも満足できるようなガンダムSEEDにしていきたいと思います。何か質問等がございましたらどんどん書き込んでください。お待ちしております。次回もお楽しみに！

第十一章 魔界忍法帳（前書き）

魔界での目覚めを果たすとき、ある人物からのねがいてフェイトは何を見るか・・・

第十一章 魔界忍法帳

フェイト

「……んっ……」

フェイトが目が覚めた周りには赤いじゅうたんだった。

???

「ほう……目が覚めたようじゃな……」

フェイトが声が聞こえる方を向くとそこには赤い袴をきた赤色の顔をした巨大な人、いや、人とは思えない人が座っていた。

???

「全く目覚めんからまさか死んだかと思ったわい。」

フェイト

「あの……あなたは？」

フェイトは立ち上がり質問をした。

閻魔大王

「わしか？ わしは地獄の番人、閻魔大王じゃ。」

フェイト

「閻魔大王!？」

フェイトは少し驚いた、なのはから聞いた事があるが閻魔大王は確か地獄の番人で……

等と戸惑っていた。

閻魔大王

「所で主よ、その身なりからして物質界の人間のようじゃが……主よ名は？」

閻魔大王に質問をされ少し戸惑ったが自己紹介をした。

フェイト

「フェイト・T・ハラオルンです……」

閻魔大王

「ふえいとじゃな、よろしくのう、さてふえいとよ、実は……」

フェイト

「あの！ 閻魔大王様！」

閻魔大王が何か言おうとしたとき、フェイトがある事を聞いた。

閻魔大王

「ん？ どうした？」

フェイト

「あの……私は死んでしまったのでしょうか？」

閻魔大王

「????、それはどういう……」

フェイトは顔を下げてこい言った。

フェイト

「友達から聞いたのですが・・・死ぬと天国か地獄のどちらかに行
くって・・・そして今私は地獄にいます、だから・・・死んでしま
ったのかなって・・・」

フェイトの声がだんだんと小さくなっていった。

閻魔大王

「ふえいとよ、安心せい、主は死んではおらん。」

フェイト

「え!？」

フェイトは閻魔大王の方に顔を上げ、驚いていた。

閻魔大王

「確かに今主は地獄にいる、しかしお前さんの場合、生きて地獄
に来てしまった、の間違いじゃ、だからおぬしは死んではおら
ん。」

フェイト

「そうですか・・・よかった・・・」

フェイトは安心したのか肩でため息をした。

閻魔大王

「ブホオン! では本題じゃが実は数時間前に主と同じ生きたま
ま地獄に来たやつがおってな。」

フェイト

「私と同じ・・・ですか!？」

フェイトはまさかと思い閻魔大王に質問してみた。

フェイト

「それってもしかして、オレンジ色の髪を束ねた女性の人ではありませんでしたか!？」

閻魔大王

「女性? いや、残念じゃが少年で変わった格好をしたやつじゃったよ、確か忍者とかいったのう。」

フェイト

「そう・・・ですか・・・」

フェイトは残念そうに目を瞑った。

閻魔大王

「して、お願いがあるのじゃが、その少年を連れ戻してくれんかのう?」

フェイト

「私がですか?」

閻魔大王

「うむ、実は少年が行ったところは魔界の中でも恐ろしいやつが住んでおる道筋にいとるんじゃ、多分大丈夫かもしれないが、念のために連れて帰ってくれんかのう。」

閻魔大王が軽く頭を下げて言った。

フェイト

「わかりました、私でよければすぐに連れて帰えます。」

閻魔大王

「おお！　ありがたや、ありがたや、では早速じゃが、苦行の道
ゝに行ってはくれんかのう、少年はそこに向かっておるわい。」

フェイト

「わかりました！　では、行ってきます！」

フェイトは閻魔大王の間お走りだした。

閻魔大王

「ふえいとや、少し待たれよ！」

閻魔大王はフェイトを呼び止めた、フェイトは閻魔大王の呼び止め
にきずき、再び閻魔大王の方をむいた。

フェイト

「なんでしょうか？」

閻魔大王

「ふえいとよ、主は戦えるかね。」

フェイト

「はい、一様戦えます。」

フェイトは閻魔大王に待機状態のバルディッシュを見せた。

閻魔大王

「・・・うむ、それを聞いて安心したぞい、ではふえいとよ、道中気を付けるのじゃぞ。」

フェイト

「はい、閻魔大王様。」

フェイトは再び閻魔大王の間を走りだし、閻魔大王の間を後にした。

閻魔大王

「ふむ・・・物質界の人間が生きたまま地獄に来ると言うことは・・・また物質界で何かあったんじゃないだろうな・・・」

閻魔大王はそう思いながらフェイトの姿が無くなるまで見守っていた。

苦行の道

???

「ちくしょう！　どうなってんだよこれは！」

少年は苦戦をしていた、少年の周りには刀を持った骸骨が少年の周りをとりかこんでいた。

???

「倒しても倒してもわんさか出てきやがって・・・なにもんだってばよこいつら！」

すると骸骨が一斉に少年に襲い掛かってきたが、少年は空中に高くジャンプして左右親指と薬指をクロスさせると・・・

???

「影分身の術!!」

ボフンボフンボフンボフンボフンボフンボフンボフンボフン
!!!!

なんと少年の分身が数体でてきた。

???

「いっけええええ！」

バキ！
ドガ！
ゲシ！
ズカ！
グシャ！
バシコン！

数体の影分身は数体の骸骨をしばきまくり、破壊した。

そして・・・

???

「螺旋玉！！」

そして本物の少年は影分身の協力のできた白い玉を最後の一体に叩き着けた。

バコオオオオン……！！！！

白い玉は少年の手の周りで巨大化し、最後の一体とまわりにいた残

骸を木っ端微塵に砕いた。

????

「ふう・・・これでよしと!」

手をパンパン! と払い少年は一息着いた。

????

「しかし・・・いつみても変な所だつてばよ。」

少年は周りをよくみてみたがあまり変わり無く、目の前には巨大な鳥井があった。

????

「道には迷っちまうし・・・どうすりゃいいんだつてばよ!」

少年は立ち上がりまた歩こうとしたが、上を見ると空を飛ぶ人の姿が見えた。

????

「何だつてばよ・・・飛んでる?」

少年は腰に付けているポーチからクナイを取り出した。

一方フェイトは閻魔大王の願いで少年を探していたら、一人の少年を見つけた、金髪のツンツンヘアーにオレンジ色の服をきた16歳ぐらいの少年を見つけた、ちなみに額には何かのマークが示されたバンダナを付けている。

フェイト

「もしかして閻魔大王が言っていた少年って彼かな？」

バルディッシュ

『おそらくそうかも知れませんが、マスター、どうしますか？』

フェイト

「かなり警戒してるけど・・・とにかく話し合ってみるよ。」

フェイトはそう誓い、少年のいる所まで離陸した。

フェイト

「あの・・・」

???

「誰だってばよあんた！ あの骸骨の仲間か？」

少年はそう言ってクナイを構えた。

フェイト

「待って！ 私は閻魔大王のお願いで、あなたを探しにきたの。」

???

「閻魔のおっちゃんから！」

どうやら正解だそうだが、少年は閻魔大王の言葉を聞き完全に警戒を
ときかけたその時。

ボコ！

ボココ！！

ボコボコボコ!!!

なんと先程の骸骨達が再び復活していた。

フェイト

「何!!!?」

????

「またかよ!!!!」

少年とフェイトは完全に囲まれてしまった。

フェイトと少年は背中を合わせた。

フェイト

「君、名前は?」

ナルト

「俺はうずまきナルト、木の葉隠れの忍者だ! 姉ちゃんは?」

フェイト

「私はフェイト、フェイト・T・ハラオウン、時空管理局の隊長をやっているの、それよりナルト君、そっちは任せるね。」

ナルト

「フェイトの姉ちゃんこそ! 頼むぜえ!!!」

骸骨達は今にも襲い掛かってきそうだった。

フェイト

「行くよ！ バルディツシュ！」

バルディツシュ

「了解、マスター。」

ナルト

「いよーし・・・行くってばよ！！！」

二人は骸骨に向かって突撃していった。

第十一章 魔界忍法帳（後書き）

いかがでしたか？NARUTOファンの皆様、お待たせしました！
ついにナルトの登場です。ナルトは本来中盤辺りから出そうと考え
ていましたが、ナルトを出してくれと意見が多かったので早めにナ
ルトを書きました。後話がかかりますがデバイスは英語がまっつ
たくわからないので僕なりに日本語にしました。違和感を感じます
がすみませんでした。質問、感想、リクエストがございましたら感
想の方にお書きください。次回もお楽しみに！

第十二章 騎士と忍者と隊長と・・・（前書き）

ナルトとフェイトにピンチが訪れるとき、黄金の騎士言われている男と対面する。

第十二章 騎士と忍者と隊長と・・・

???

「まさかこんな所に来るとはな・・・」

全身金色の鎧をまとった男が苦行の道を歩いていた。

???

「魔界と幻想界は自由に行き来できるが・・・まさか死者が通る道に来るとは・・・」

どうやら彼は幻想界の住人らしい。

???

「ん？ 向こうがやけに騒がしいな、なにがあったんだ？」

金色の鎧の男は騒がしい所まで歩いた。

同時刻

苦行の道

ナルト

「多重影分身の術!!」

ボロボロボロボボン!!!!

ナルトは先程よりもはるかに多い影分身を出した。

影分身は

「おりゃあー!!」

「このー!!」

「いっけえー!!」等と言いながら骸骨をしばきにしばきまくった。

フェイト

「バルディッシュ!」

バルディッシュ

『了解』

フェイトはバルディッシュを鎌状に変形させ骸骨達を薙払った。

ナルト

「姉ちゃんやるなあ! 一体どんな忍術だってばよ?」

フェイト

「忍術と言うより魔法なんだけど・・・それよりも君もすごいね、その影分身・・・だっけ? まるで本物みたいだね。」

ナルト

「へへ! サンキューだってばよ! さあ! 残りもかたづけようぜー!!」

フェイト

「うん、行こう!」

ナルトとフェイトは残りの骸骨をかたづけに入った。

一方金色の鎧をまとった男は。

???

「ふ、どうやら僕が出る幕は無さそうだな。」

金色の鎧をまとった男は騒がしい所まで来ていた。

そこには金髪の少年と女性が骸骨と戦っていた、現在二人の方が有利で時間がたつともう骸骨が全滅していた。

男は安心してその場から立ち去ろうとしたが・・・

???

「っ!!! 馬鹿な・・・まさか、そんな!」

男にとって信じられない出来事が起きた。

少年と女性の周りに再び何かが出てきて周りを囲んでいた。

???

「ちい!!!」

男は状況が変わったので、二人の援護に向かうため走りだした。

一方二人は・・・

ナルト

「今度はなんだってばよ!!!」

ナルトとフェイト周りには青い鎧をまとった騎士数体と緑色のローブをまとった髭の生えた男が数体、そして緑色の球体をしたモンスターが数体、取り囲んでいた。

フェイト

「今まで見たことの無い分類だね、ナルト君、まだ戦える？」

ナルト

「ちよつと力を使いすぎたけど、まだまだ行けるってばよ!!
姉ちゃんこそ大丈夫か？」

フェイト

「君と同じ、でも数は数だしね・・・ある程度倒したら逃げるよ。」

ナルト

「え！ 逃げんのかよ！ 俺はまだ戦えるってばよ!!」

ナルトはあまり納得できないようだ。

フェイト

「ナルト君、納得できない気持ちはわかるよ、でもここでやられたら元も子もないよ、できるだけ戦闘はさせて、チャンスが見つかったら一斉に逃げるよ。」

ナルト

「・・・わかったってばよ。」

ナルトは仕方なく作戦を了解した。

フェイトとナルトは戦闘態勢に入った・・・その時。

???

「君達!!　そこを退くんだ!!」

ナルト&フェイト

「「えっ!!」」

上空から声が聞こえ、上を見ると一人の男が落ちてきている。

???

「行け!　イラニスタンの油!!」

男は油の壺見たいな物を投げつけた、それにきずいたナルトとフェイトは少し離れた、そしてパリーン!!!!　と割れる音が鳴り響いた、そして・・・

ボウウウウ!!!

落ちた所から火が燃え上がっていた、これに直撃したモンスターや騎士達、ローブをまとった男達過半数は燃え上がり灰となっていた。

そして先程の男が着地に成功すると同時に、男は腰から剣を、背中から盾を取り出した。

ギルガメス

「僕はギルガメス、詳しい話は後で、それじゃ!」

ギルガメスと言う男は敵の群れに突っ込んでいった。

ナルト

「フェイトの姉ちゃん！　俺たちも行こうぜ！！」

フェイト

「そう・・・だね！　行こう！」

ナルト

「いよっしやあ！！　行くぜえ！！」

ナルトとフェイトはギルガメスに続くように突っ込んでいった。

ギルガメス

「ハイパーガントレット！！」

ガン！　ガン！　ガン！！

ギルガメスは青い騎士に向かって腕に装備しているガントレットを叩きつけたあと。

ギルガメス

「よし！　くらえ！！」

ズバン！！！！

ギルガメスは続くように踏み込み突きをした、踏み込み突きをした結果、先程の騎士と他の敵たちを巻き込んで倒した。

フェイト

「バルディッシュ！」

バルディッシュ

『了解』

フェイトは再び鎌状のバルディッシュを神速の速さで斬っていた

ザン！ ザン！！ ザン！！！！

神速の速さで斬られていった敵はそのまま真っ二つに斬られそのばで消滅した。

ナルト

「フェイトの姉ちゃん！！ ギルガメスの兄ちゃん！！ 後は任せてくれてばよ！！！！」

フェイトとギルガメスがナルトの姿を確認すると残り少ない敵の群れから離れた。

理由は簡単だ。

二人のナルトが手に先程のよりもでかい螺旋玉を作って敵の群れに突っ込んでいった。

その名も・・・

ナルト

「大玉螺旋丸！！！！」

大玉螺旋丸は複数の敵に当たると先程のよりもかなりでかいドーム型の衝撃破が広がった。

しばらくしてやみナルトは後ろに下がった

ナルト

「いよっしゃあ!!!」

ガッツポーズを決め見えた先には木っ端微塵に吹き飛んだ荒地だった。

ギルガメス

「君、すごいじゃないか、一体どれだけの魔力があるんだい？」

ギルガメスは大玉螺旋丸を見て内心驚きながらも感心していた。

ナルト

「まりよく？ さっきのは、チャクラ、を圧縮させてぶつけたと同時に圧縮されたチャクラをぶつける術なんだ！」

フェイト

「チャクラ？ 魔力と何が違うの？」

フェイトは首を傾げながらナルトに質問した。

ナルト

「チャクラってーのは、俺達忍者の中にある生命エネルギーみたいなもんだけど・・・知らねーのか？」

ギルガメス

「いや、初めて知ったよ、とてもすごいエネルギーなんだね。」

ギルガメスは納得した。

ナルト

「それよりもギルガメスの兄ちゃんの方がすごかったぜ!!」　チ
ヤクラ無しで火遁の術無しで炎操ってるなんてすげえってばよ!!」

ギルガメス

「かとのじゅつ?　　ああ!　　さっきのはイラニスタンの油を
使って火を起こしたのさ。」

ナルト

「いつ、いら・・・何て??」

どうやらナルトは聞き取れなかったそうだ。

ギルガメス

「イラニスタンの油、魔力の入った油で何か衝撃を起こすとすぐに
炎が燃え上がる仕組みになっているんだ。」

フェイト

「すごいですね。」

フェイトが興味有りげにイラニスタンの油を見ていた。

ギルガメス

「いや、君の戦いっぷりもなかなかの物だったよ。」

ナルト

「そうだってばよ!!　　杖見てえなもんからいきなり鎌に変形す
るなんて・・・何て武器何だ?」

ナルトはフェイトのバルディッシュをまじまじと見ていた。

フェイト

「これはデバイスって言います。」

ギルガメス

「でばいす??」

聞いたことがない武器だな。」

フェイト

「デバイスは我々時空管理局、魔術士が装備する武器で色々な種類があります、ちなみに私のはバルディッシュと言います。」

フェイトは変身を解きバルディッシュを待機状態にした。

ナルト

「バルディッシュが小さくなったってばよ!!?」

ナルトは待機状態のバルディッシュを見て驚いた。

ギルガメス

「なるほど・・・変身を解くとその武器は待機状態になり小さくなるのか・・・持運びに便利だな。」

ギルガメスはうなずきながらそう言った。

フェイト

「突然すみませんが・・・あなたは?」

ギルガメス

「そう言えばまともな自己紹介はまだだったな、僕はギルガメス、黄金の騎士と言われている、よろしく。」

ナルト

「俺はうずまきナルト！ 木の葉隠れの忍者だってばよ！！」

フェイト

「フェイト・T・ハラOWNと言います、時空管理局の隊長をつとめています。」

三人はそれぞれ自己紹介をした。

ギルガメス

「所で君達はこれからどうするつもりだ？」

ギルガメスが質問した。

フェイト

「私達はこれから閻魔大王の間に向かいます。」

ナルト

「閻魔のおっちゃんが呼んでるそうだしな！」

フェイトとナルトは一旦閻魔大王の間に戻るらしい。

ギルガメス

「なるほど・・・なら僕も同行させてくれないか？ 閻魔大王には話があるし、そして君達にも知ってもらいことがあるからな、かまわないかい？」

ギルガメスが閻魔大王の間まで同行をお願いした。

フエイト

「はい、かまいませんよ、それに私も聞きたいことがありましたので。」

ナルト

「一緒に行こうぜ！ ギルガメスの兄ちゃん！」

フエイトとナルトは歓迎した。

ギルガメス

「すまない、では改めて、よろしく頼むぞ、フエイト、ナルト。」

ナルト&フエイト

「おう！！」

「はい！」

三人は苦行の道を後にし、閻魔大王の間まで足を急がせた。

黄金の騎士ギルガメス、彼の閻魔大王様に話とは？　そしてナルトとフエイトに伝えたい事とは？　そして世界は大きなゆらぎに巻き込まれる、それがもう一つの世界であっても。

第十二章 騎士と忍者と隊長と・・・（後書き）

いかがでしたか？黄金の騎士、ギルガメス登場です。ゲームでも正直主力メンバーの一人でした（笑）そしていまきがついたカプコンキャラが一人もいないと言うこと（汗）というわけで読者に出てきて欲しいカプコンキャラを募集しちゃいます。皆様のご応募お待ちしております。それでは次回もお楽しみに！

第十三章 謎の少年、謎の敵（前書き）

もう一つの世界に謎の少年が現れる、それは敵か味方か、それは零
児達にはわからない・・・

第十三章 謎の少年、謎の敵

零児

「ん・・・ここは・・・」

空は真っ黒、周りは真っ赤に染まった交差点で零児が目覚めます。

零児

（物質界？ いや、にしては様子が変だ・・・）

そう、人はいる、だがその人はぴくりとたりとも動かなかった。

零児

（とにかく動くか・・・ボーっとしてても何も始まらない。）

零児は武器を拾い歩きだした・・・が。

????

「あゝあ、お腹すいたんだな・・・」

????

「馬鹿やろう！！ 俺だってすいたわボケ！！」

いきなり二体の化け物が零児の前に姿を表した。

零児

（何だ？

化け物？

にしてはへんてこな格好をしているな・・・

・）

零児はあくまでも冷静に状況を確認した。

???

「もう我慢できないんだな・・・いたたきますなんだな～～～!!」

???

「てめえゴラ!! 勝手にくうなやボケ!! いただきます」

!!

二体の化け物が口を大きく開けたその時、零児のまわりにいた動かない人々は青い炎と共に消えていった。

零児

「なに!!」

さすがの零児もコレには驚きを隠せなかった、そしてさっきの声で零児は化け物どもにきずかれてしまった。

???

「ん～～～? 何なんだなこいつう??」

???

「動いてやがると言うことは・・・こいつまさかフレイムヘイズか?」

???

「もしかしたら零時迷子かもしれないんだな～～～!!」

二人の化け物が零児を見ていた。

零児

「おいそこの化け物！　今の人達に何をした！」

といいながら火燐を構えた。

???

「何でお前なんか話さなきゃならんのだ！」

???

「そうだぜ！！　どうせお前も存在を消されるんだからよおおお
お！！！！」

二人の化け物が一斉に襲い掛かって来た。

零児

「俺を滅ぼす？　やれるならばやってみるのだな！！」

零児VS化け物、謎の街による戦いが始まった。

御崎町、電気街

超死ぬきツナ

「ジェットキック！」

ツナが炎によって加速されたキックを化け物、紅世にお見舞いした。

紅世

「ぐえ！！！！」

紅徒は大きく吹っ飛び山本の方に飛んでいく。

山本

「オーライオーライ！　よし来た！！」

山本はバットを構え紅徒に野球感覚で降った。

シャキン・・・

するとバットは刀に変形しそのまま大きく峰打ちを食らわした。

紅世

「ぎああ！！」

紅世は大きく上に吹っ飛で行った。

山本

「行っただぜ！　山本！！」

獄寺

「わーてるよ！！　この野球バカが！！！！」

いつの間にか上空に獄寺がダイナマイトを構えていた。

獄寺

「二倍ボム！！！！」

ドドドドドーン！！！！

獄寺の複数のダイナマイトは直撃した。

紅世

「ぎいやあああ！！！！」

獄寺

「十代目！！　　今です！！！！」

超死ぬきツナ

「うおおおおお！！！！」

バアキイイイイ！！！！

ツナは上空に舞い上がり、紅世にアッパーカットを食らわした。

紅世

「ぐぎあああああ・・・」

紅世そのまま消滅した。

山本

「おし！　　終わり！」

山本は刀を肩に掛けた。

獄寺

「たく！　　しつけえぜ！」

獄寺が一息着いた。

ツナ

「・・・ふう・・・終わった。」

超死ぬきモードが解けて、呼吸を整えた。
ハイパー

ツナ

「紅世だっけ？ 何かしつこくない？」

山本

「ああ・・・一昨日と昨日を合わせたら・・・もうざっと50体位倒してねえか？」

獄寺

「くそ！！ 一体全体どうなってんだ！！」

三人はそのばに座り込んだ。

ツナ達がここに来てから3日がたった。

あの後三人は坂井家に居候する事になった、その代わり一宿一飯の恩義として、紅世の討伐の手伝いをする事になった。

????

「そっちはかたずいたようだな。」

ツナ

「リボーン！」

リボーンがやってきた。

獄寺

「リボーンさん！ 何か情報は見つかりましたか？」

どうやらリボーンは情報収集のためわざわざ紅徒が来るかもしれない中、情報を集めていた。

リボーン

「いや・・・たいした情報はつかめなかった、分かったことといや、この街は異常だったのがわかった。」

ツナ

「昨日もそんなこと言ったよなお前・・・あゝもう!! 一体どうなってんだよ!!」

ツナは頭を抱えながら悩んだ。

ここに来てから情報は無し・・・帰る方法も見つからない・・・ツナ達はどうすることもできなかった。

???

「何をもがいている？」

ツナ

「シャナ! それに悠二先輩!」

そこにはシャナと悠二が立っていた。

山本

「まあ終わったけど・・・結構疲れるっすね・・・」

山本は笑いながら汗を拭った。

シャナ

「ふん、これごときに疲れを出すとは・・・情けないな。」

獄寺

「んだとゴラァ!!」

獄寺は急に立ち上がりダイナマイトを構えた。

ツナ

「ちよっ!! 獄寺君!! こらえてこらえて!!!!」

ツナは獄寺を全力で止めた。

山本

「でもさ、いくらなんでも多すぎないっすか? いつもこれぐらい討伐してんのかよ?」

シャナ

「・・・・・・」

シャナは急に黙り込んだ。

悠二

「シャナ?」

獄寺

「おい! 何黙り込んでんだ! 何か言えゴラァ!」

獄寺はシャナを挑発したが・・・

シャナ

「・・・・・・・・」

やはり黙り込んでいた。

ツナ

「シャナ？　　どうしたの？」

アラストール

「その事に関しては我から説明させてはくれんか？」

ツナ

「アラストール！」

シャナの胸元に付けていたペンダント、アラストールが喋りだした。

獄寺

「ちようどいい、どう言う事だ？」

アラストール

「我々フレイムヘイズは色々な紅世と戦ってきたが・・・これだけ連続で紅世と戦った事は我もシャナも初めてだ。」

ツナ&獄寺&山本

「えっ！！」

三人はかなり驚いた。

悠二

「そうなのシャナ！？」

いつもシャナと共にいる悠二でさえ驚きを隠れなかった。

シャナ

「・・・ああ、私もここまで連続で紅世と戦ったのは初めてだ。」

リボーン

「これは本格的にまずいかもしれねーな・・・」

ツナ

「そ、そんな・・・」

しばらくその場は重たい空気が流れていた・・・すると・・・

????

「そこのお前達、そこで何をしている？」

ツナ

「えっ!？」

ツナ達は声の方に向き、シャナは刀を構えた。

その男は赤いジャケットを着ており、手には金色の銃を構えていた。

零児

（何なんだこいつら？

妙な格好をしているな・・・）

零児は金を構えながら思った。

零児

（しかし向こうの三人・・・どこかで見たことがあるが・・・まさか？）

零児は向こうの三人の少年達を見てある可能性を感じた。

零児

「おい！　その三人！　もしかして・・・」

言い掛けた所で・・・

????

「おい、お前も紅世か？　　紅世ならば斬る。」

一人の小さな赤髪の女の子が刀を構えていた。

零児

「ぐぜ？　　何だそれは？　　まさかあの化け物の事か？」

????

「っ！！」

少女は驚いた顔をしていた。

????

「シャナ、この人もしかして・・・」

どうやら少女はシャナと言うらしい。

シャナ

「うん悠二、そうかもね・・・」

シャナに話し掛けた少年、悠二とシャナは確信した。

零児

「話を続けるぞ、その三人。」

ツナ

「え！　俺たち!？」

急に指摘されたツナ達はびっくりしていた。

零児

「左から沢田綱吉、獄寺隼人、山本武の三人か？」

ツナ

「んなぁ!!！」

獄寺

「はぁ!!！」

山本

「ええ!!！」

急に名前を指摘された三人は驚きを隠せなかった。

獄寺

「ちょっと待て!! 何で俺らの名前を知ってやがんだ!!」

獄寺は納得ができないぐらいまで声を出した。

零児

「何でかって? まあ・・・警察みたいなものかな?」

山本

「なるほど! 警察か!」

山本は納得した。

ツナ

「てっ事は・・・俺達を探しに?」

零児

「ああ、君たちを探していた。」

零児の言葉に三人は安心したが・・・

????

「警察? 本当に警察かな?」

零児

「なに?」

さっきの言葉の方にむくとそこには小さな黒いタキシードを着た赤ん坊が立っていた。

ツナ

「リボーン！　それってどういう・・・」

赤ん坊はリボーンと言う。

リボーン

「その赤いジャケット、お前、政府特務機関、
「森羅」のエージェントだろ。」

零児

「っ！！」

いきなり正体を明かされて零児は驚きを隠せなかった。

山本

「しん・・・ら？」

獄寺

「聞いたことがある、確か日本ではあり得ない怪奇現象事件関係を
管理している政府組織、しかしその正体は極一部の人間しか知らな
いと聞きます十代目。」

ツナ

「え？　　ええっ！？」

ツナはかなり混乱していた。

零児

「よく知ってるな・・・お前ら一体なにものだ？」

零児は落ち着きを取り戻し、ツナ達に質問した。

リボーン

「俺たちは・・・」

リボーンが言い掛けた時・・・

シャナ

「おい！　今は後だ！　何か来る。」

シャナは何かを感じ取った。

すると零児達の周りから黒いもやがかかっていた。

零児

「続ゆらぎ!！」

山本

「ゆらぎ?」

全員が戦闘態勢に入った。

黒いもやが消えたとき、顔の無い白い鎧を着けた化け物がいた。

???

「・・・・・・・・」

悠二

「何だこいつら?　紅世・・・じゃ無いよな?」

シャナ

「わからない、でも紅世じゃ無いって事はわかる。」

零児

「おい！　今は協力するしか無いが・・・どうする。」

シヤナ

「ああ、今は協力する、だが足手まといにだけはなるなよ。」

零児

「そいつは重畳、じゃ行くぞ!!」

零児達は戦闘に入ろうとしたその時。

???

「離れてください！　俺が行きます!!」

零児

「何!？」

全員が空を見るとそこにはショットガンを構えた、黒髪の黒いジャケットを着た少年がショットガンを白い化け物に打ち続けた。

ショットガンの弾は白い化け物にヒットしたと同時に黒いもやがかり白い化け物は消滅した。

着地するとまだ残っている白い化け物が少年に襲い掛かって来た。

しかし・・・

ザン!!!

少年は腰から青色の刀芯を帯びた刀を斬り付け、白い化け物は消滅。

さらに遠くから来た化け物も・・・

???

「くらえ!! 次元破!!」

青色の衝撃破を放ちさらに数体の白い化け物は消滅した。

なんと謎の白い化け物は少年一人の力によって全滅した。

???

「終わったか・・・」

少年は刀を鞘に戻した。

零児

「君は・・・一体？」

???

「有栖零児さんですね？」

零児

「なぜ俺の名を!!」

少年は零児の方を向き手を差し伸べた。

タイト

フォース

「タイト・F・イグジットです。 有栖零児さん、あなたを探して

いました!」

少年、タイトは笑顔で自己紹介をした。

第十三章 謎の少年、謎の敵（後書き）

いかがでしたか？ ついにオリキャラの一人目、タイト・F・イグジットが登場です。性格、武器名はいつか紹介しますのでその時までではこれからもタイト君の応援よろしくお願いします。

タイト

「次回もお楽しみに！！」 ぎいやあ！！ 僕のセリフ！

！！

第十四章 もう一つの世界（前書き）

世界は広い・・・世界は一つではない・・・それが今零児達がいる
物質界でも・・・

第十四章　もう一つの世界

タイト

「有栖零児さん、あなたを探していました！」

少年、タイトは笑顔で自己紹介をした。

零児

「俺を？　何故だ？　それに君は・・・？」

零児は少し混乱していた、初めて会った人間が自分の事を知っているからだ。

タイト

「俺は・・・」

シャナ

「ちょっと待て！」

急にシャナに話を止められた。

シャナ

「次から次えと・・・お前は一体何者・・・」

タイト

「その赤い長髪に炎を帯びた刀・・・君はもしかしてフレイムヘイズか？」

シャナ

「なっ！！！！」

アラストール

『何！！！！』

質問を質問で返された上に自分の正体を知っている事にシャナとアラストールは驚きを隠せなかった。

シャナ

「ちよっと待て！ 何故だ！ 何故私の正体を知っている！」

まさか・・・紅世の王か！！」

タイト

「ち、ちよっと待て！！ 本当に紅世の王だったら助けずにそのまま高見の見物してるって！！ だからそんな物騒な物を俺に突き付けるな！！！！」

シャナは納得できない顔をしながら刀を鞘に収めた。

零児

「話を元に戻す、何故君は俺を知っている、そして君は何者だ？」

タイト

「ゼエゼエ・・・俺はある組織の部隊のメンバーである物質、ある人物の散策を行っていました、ある物質は俺たちの敵対組織から強奪しましたが、追い詰められて・・・途中で見失って・・・気が付いたらこの世界にいました、そしてある人物は数年前、魔大戦を最終に導いた別世界の組織の二人を探していました、それが・・・」

零児

「俺とあいつか・・・なるほど、納得がいくな。」

獄寺

「ちょっと待ちな！」

獄寺が話の中に入った。

獄寺

「あんた、今、別世界　、　って言ったな？　　つまりその別世界ってえのは・・・」

タイト

「ああ、ここは君たちや零児さんの世界ではない・・・ここは俺の世界、俺やその女の子の物質界だ。」

零児

「な、何!!」

ツナ

「そ、それってどういう・・・」

タイトの言葉に全員が息を飲んだ。

タイト

「正確には・・・俺にとっては過去の物質界ってとこだけど。」

悠二

「え!?!　　てっ事は、君は未来の人間って事かい!?!」

タイト

「ああ、そういう事になるぜ。」

山本

「すげえ!! 本物の未来人かあ!!」

ある人数は呆れながら聞き、ある人数は頭を抱えながら聞いていた。

零児

「ふう・・・これはまた、話が大規模になってきたな・・・ちなみに、そのある組織って言うのはどこの組織だ?」

零児は頭を抱えながらタイトに質問してみた。

タイト

「エミルダーク、と言います、エミルダークはある物質、パラレルストーンと言う石で全異世界を一つにするのがそのエミルダークの目的です。」

零児

「エミルダーク! パラレルストーンだと!!」

零児はそれを聞いてかなり動揺した。

タイト

「し、知っているのですか!?!」

零児

「知っているものにもさつき時空管理局を襲った奴等じゃないか!!
それにパラレルストーンは確か・・・!!」

タイト

「そっそれってまさか！ 零児さんの世界にエミルダークが現れたと言う事ですか！！？」

零児

「ああ！ 確かパラレルストーンを返してもらったのかいって襲い掛かれて、そして俺達四人が続ゆらぎに飲まれたんだ。」

タイト

「あいつら！！ もうそこまで・・・！！ パラレルストーンは？ パラレルストーンはどうなったのですか！！！」

タイトはかなり焦っていた、アレを奪われたら世界が大変な事になる・・・そう思ったからだ。

零児

「あの石は・・・俺もよく・・・ん？」

零児はポケットをあさると中から奇妙に光る石が入っていた。

零児

「これは・・・」

リボーン

「何かだか奇妙だな。」

タイト

「パラレルストーン！！ 無事だったんだ！！！！ よかったあ・・・」

タイトは安心して息を整えた。

タイト

「あの、零児さん！　その石を俺に・・・」

???

「我らエミルダークに返してはくれませんかねえ？」

零児

「誰だ!!」

タイト

「この感覚・・・まさか!!」

シャナ

「ビルの上にいるぞ！」

全員がビルの上を見ると、そこには全身黒いローブを身にまとった男がいた。

その男はビルの上を飛び、地上に着地した。

シャナ

「何者だお前は！」

???

「貴様に名乗る名前などない・・・それよりもパラレルストーンを渡せ・・・時は満ちた・・・」

幻想界

平原

???

「我ら、エミルダーク、この世界の神なり・・・」

スタン

「何者だ！ おまえら！！！」

なのは

「気を付けてくださいスタンさん！ この人、魔力こそ感じません・・・すごい殺気を感じます！」

スタンはディムロスを、なのははレイジングハートを構えて黒いロ―ブとの戦闘態勢に入った。

天界
イシターの間

???

「てめえら俺らエミルダークの前ではただのゴミムシ以下の存在・
・」

キラ

「な、何なんですか！ あなたは！！」

銀時

「いきなり出てきて訳のわからん事言ってるじゃねーよこのクソガ
キが！」

小牟

（エミルダーク・・・さっきわしらが戦った組織か・・・）

イシター

「気を付けてください皆様、この者は・・・」

ワルキューレ

「はい、彼、もはや人間の出せる気を感じます。」

魔界

苦行の道

???

「とにかくさまらはおれら神に逆らえねえって事だ・・・」

ナルト

「てめえ・・・いきなり出てきてなにいつてんだ!」

ギルガメス

「気を付けろナルト君、こいつは・・・」

フェイト

「はい・・・今までに無い殺気を感じます・・・（それにエミルダークって・・・まさか!）」

もう一つの物質界

御崎町

???

「とにかくパラレルストーンをこちらに、さもなくば・・・」

男が手を上げた、それを見て全員は戦闘態勢に入った、男が手を横に振った、すると・・・

シャナ

「っ!! 　なん・・・だ!!」

悠二

「シャナ!!! 　くう!!!」

なんとシャナと悠二は黒いもやに飲まれそうになっていた。

ツナ

「な、何がどうなってんだよ!!!」

獄寺

「じゅ、十代目!!!」

山本

「獄寺!!! 　ツナ!!!」

リボーン

「やべーなこれは・・・」

ツナ達も黒いもやに飲まれそうになっていた。

零児

「これは続ゆらぎ!! 貴様何を!!」

タイト

「やっ止めろ!! この少女達は無関係ない!!」

???

「そんな事は知らん・・・次元の狭間にさ迷うがいい・・・」

全員

「「「「「うわあああああ!!」」」」」

全員が続ゆらぎに飲まれてしまった。

???

「これでよい・・・これはエミルダークのため、シグナ様のため・・・我々も行くか・・・」

男は続ゆらぎに飲まれながら消えていった。

エミルダーク基地

隊長

「そうか・・・奴らも・・・わかった。」

隊長が誰かとの通信をしてそれを終わったところだった。

???

「ククク・・・隊長さんよお・・・面白い事になってんじゃねえか。」

頭に包帯を巻いた袴を着た男が立っていた。

隊長

「・・・高杉晋助か・・・何のようだ？」

男、高杉が笑いながら煙管を吹かした。

高杉

「ちょっとした様子見さあ・・・銀時の事も気になるしな・・・」

隊長

「ならば行くか？　今おそらく物質界に行ってると思うぞ・・・」

高杉

「今回は遠慮する、どっかの軍人さんのところに行かねえとな・・・確かザフトだったっけか？」

隊長

「あの軍は手懐けるのが大変だぞ、できるのか？」

高杉

「できねえなら潰すまでさ・・・ククク・・・」

高杉は奇妙な笑い声と共に隊長から離れた。

隊長

（高杉晋助・・・あの過激派の男が我々に協力するとは・・・どう
いう風の吹き回しだ？）

隊長はそう思いながら画面を見ていたその映像には時空管理局が映
っていた。

第十四章　もう一つの世界（後書き）

いかがでしたか？自分的にはシリアスな展開になってきました。そして攘夷きつての過激派、高杉晋助が登場です（まだ影の存在ですが（汗））エミルダークと鬼兵隊の関係とは一体・・・そして散り散りになった四人とその仲間達の運命はいかに！！！！

タイト

「次回もお楽しみに！！」　　oooooooooooooooooooo

またかあ

ああああ！！！！

第十五章 少女の目的、そして再会（前書き）

少女の目的を知ったとき、時空管理局の前にエミルダークが現れる、
そして・・・

第十五章 少女の目的、そして再会

物質界

時空管理局応接室

はやて

「・・・なるほど・・・大体話がわかってきたわ。」

時空管理局応接室、そこにははやてと先ほど外で戦闘を行っていたスバルとティアナ、そして戦闘終了後に現れた謎の少女がソファ―に座っていた。

ティアナ

「すみませんでした八神部隊長・・・私達がもっとしっかりしていればこんな事には・・・」

ティアナとスバルかなり落ち込んでいた。

はやて

「大丈夫や、だから気にしたらあかんで、それよりも・・・」

はやては少女の方を向いた。

はやて

「確かメデイちゃんやったっけ？」

メデイ

「はい、メデイ・ユグラムと言います。」

少女、メデイはお辞儀をして自己紹介をした。

ピンク色の長髪に黒いジャケットを着た少女で、腰には刀をかけている。

はやて

「一樣事情を聞かせてはくれへんか？　君はどっからきたん？
そして君がここに來た理由を。」

メデイ

「信じて……くれませんとは思いますが……実は……」

メデイはいまいえるすべてを言った。

自分が違う世界から來たこと、そして自分の目的を。

はやて

「んー……にわかには信じられへんけど嘘言ってる訳でもないし
なー……」

はやては頭を抱えながらうなずき、スバルとティアナはなにがなん
だかわからないような顔をしながらうなずいた。

スバル

「メデイだっけ？　その探している人って？」

スバルがメデイに質問をしてみた、メデイの目的、それは、ある人
物を探していた。

メディ

「私のパートナーです、四日前に行方不明になったパートナーを・・・」

メディはうつむきながらそういった。

はやて

「なるほど、つまりそのパートナーがここに居るかもしれんからここで情報収集しようというわけやな。」

メディ

「はい、タイト・F・イグジットってゆうのですが・・・」

はやて

「タイト・・・悪いけどそんな感じの子はうちの管理局にはおらんなあ・・・」

メディ

「やっぱり・・・」

はやて

「でももしかしてここにきてんねやろ？
だったらうちらも協力するさかいに！」

メディ

「ほ、本当ですか!!」

はやて

「聞いた以上ほっとかれへんしな、任せとき、二人とも、ええやんな。」

スバル

「はい！　もちろん！」

ティアナ

「了解しました！」

メディ

「皆さん・・・ありがとうございます！」

メディは少し涙目になりかけたがそこはこらえて笑顔でお礼をした。

はやて

「でもその代わりと言っちゃなんやけどうちらも今さがさなあかん人物がおってな、まずそれが終わったらでええかいな？」

メディ

「かまいません、むしろ私も協力させてはくれませんか？」

はやて

「ほんまか？　　おおきに！　　助かるわ！」

はやてはメディに握手をした。

メディ

「あの・・・ところでその消えた人物と言うのは一体？」

はやて

「うん、その人物はな・・・」

はやてが説明に移ろうとしたその時・・・

ウーウーウーウー!!!

放送

「緊急事態発生！ 緊急事態発生！ 管理局前に例の謎の部隊が接近中！ 魔道士はただちに応戦せよ！ 繰り返します、管理局前に・・・」

緊急の放送が入った。

はやて

「またかいな！ しかももうこんな早くに!!!」

スバル

「て、ティア！ もしかして・・・」

ティアナ

「ええ・・・エミルダークかもしれないわね・・・」

メディ

「エミルダーク!!!!」

急な敵にはやて達が驚いてはいたが一番驚いているのはメディだった。

はやて

「とにかくティアナとスバルはエリオとキャロを連れて応戦を！
私は司令室に行って状況の確認に行ってくるさかいに！！」

スバル&ティアナ

「了解！！」

メディ

「待ってください！！ 私も行きます！！ もし本当にあの部隊なら・・・！！」

メディは拳をぐっと力を入れた。

はやて

「何か訳ありのようやな・・・わかった！ 見るからに戦えそうやしな！ スバル！ ティアナ！ 案内してやってや！」

スバル

「わかりました！ 行こうメディ！」

メディ

「はい！！」

三人は応接室を後にした。

はやて

「みんな・・・頼んだで！」

時空管理局

入り口前

兵士

「はああ！！！」

一人の兵士がそこで長剣を構えている女性に長剣を振りかざしたが。

スバ！！！！

逆に返り討ちになりそのまま倒れた、さらに数体の兵士も襲い掛かって来たが女性の剣さばきにより襲い掛かって来た兵士は全滅した。

????

「そんなものか・・・話にならん。」

女性は剣を振り再び構えた。

すると背後からハンマーを構えた小さな女の子が背中を合わせた。

????

「ヴィーダか、状況は？」

女の子ヴィーダが肩で息をしながらハンマーを構えた。

ヴィーダ

「シグナム、こいつら実力はたいしたことはねえけど数は多いぞ。」

そう、実のところ倒しているのは倒しているが数が多いのだ。

シグナム

「確かに、どこからわいて来るのだこの人数は。」

女性、シグナムも肩で息をしながら長剣を構えている。

ティアナ

「ヴィーダ副隊長！ シグナム副隊長！」

二人が声の方を向くと、スバルとティアナ、そして槍を構えた男の子と小さな龍とともにいる女の子、さらにメディがいた。

シグナム

「援軍のようだな。」

ヴィーダ

「ああ、フォワード陣に、あれは・・・はやてが言ってた奴か。」

スバル

「シグナム副隊長！ ヴィーダ副隊長！ 援護します！！」

全員がそれぞれの武器を構えて二人の近くまで来た。

ヴィーダ

「ああ、数なら数で勝負だ、行くぞお前ら！」

フォワード陣

「」「はい！！！！」「」

シグナム

「それとそこのお前、実力はあると見ていいな。」

メディ

「はい！ 任せてください！」

メディも鞆から紫色の刀芯を帯びた刀を取出し構えた。

シグナム

「ふ、期待している、行くぞ！」

全員が戦闘を行おうとしたその時・・・

バチ！

バチバチバチバチ！！

ボワーン・・・

全員の目の前に黒い渦が現れた。

ヴィーダ

「なんだ・・・これ？」

シグナム

「わからん・・・全員！ 油断するなよ！」

そして黒い渦がやみ、出てきたのはかなりの数の団体が出てきた。

零児

「くそ！ 今度はどこだ！」

小牟

「お！ 零児くく！！ 久しぶりじゃのう！！」

零児

「小牟！？ てか、ほんの三時間会ってないだけだろうが。」

なのは

「フェイトちゃん！」

フェイト

「なのは！ 無事だったんだね！」

なのは

「うん！ それに有栖さんに小牟さんもよくご無事で！」

零児

「ああ、これで全員揃ったな。」

小牟

「うむ！ それに懐かしい面子も揃っておるのう。」

そこには先程まで行方不明となっていた四人と数人の団体が出てきたのであった。

スタン

「零児さん！！ 小牟さん！！ お久しぶりです！！」

小牟

「おおスタン！ 久しぶりじゃのう！！」

金髪で鎧を身にまとっているソーディアンマスター、スタン・エル

ロン

零児

「本当に久しぶりだな、それにギルガメスやワルキューレも。」

ワルキューレ

「本当にお久しぶりです、零児さん、小牟さん。」

ギルガメス

「一年ぶりですね、僕達が再び集まるのは。」

乙女の戦士、ワルキューレ

黄金の騎士、ギルガメス

この三人はちょうど一年前零児達と魔大戦を戦いぬいた仲間たちである。

小牟

「うむ、本当に久しぶりじゃ！ 見慣れん面子もいるそうじゃが・

・・」

零児達の後ろにはほとんど知らない奴らばかりだった。

銀時

「おいおい今度はどこなんだよコンチクショウが！」

銀髪の天然パーマ、坂田銀時

キラ

「な、何なんだ、この人達は・・・」

地球連合軍アークエンジェル所属、キラ・ヤマト

ナルト

「何か・・・変わった格好した奴らばかりだったよ・・・」

木の葉隠れの忍者、うずまきナルト

シャナ

「ここは私達の・・・町じゃ無いわね・・・」

炎髪灼眼の少女、シャナ

悠二

「じゃあここは・・・」

零時迷子、坂井悠二

ツナ

「ここは・・・また変なところに飛ばされたんじゃない・・・」

ボンゴレファミリー十代目ボス補佐、沢田綱吉

獄寺

「十代目！！　お怪我はありませんか！！？」

同じくボンゴレファミリーメンバー未来右腕、獄寺隼人

山本

「いろんなところ飛ばされて・・・まるでゲームだな!!」

同じくボンゴレファミリーメンバーでツナの親友、山本武

リボーン

「時空管理局か・・・てことは俺たちは戻ってこれたようだな。」

ツナの家庭教師ヒットマン、リボーン

タイト

「時空管理局・・・てことは零児さん達の世界か・・・」

そして謎の少年、タイト・F・イグジット

全員世界観も人物も違うため、かなり混乱しているものもいれば、冷静に判断する人物もいた。

そんな中・・・

メディ

「タイト!!!」

タイト

「メディ・・・その声! まさかメディか!？」

タイトが振り向くと眼中にメディが映った。

メディ

「タイトの馬鹿!! あのあと一体どれだけ心配したのかわかってるの!!!」

タイト

「あっ・・・いや、その・・・」

メディがタイトにどんどん距離を縮めていく。

メディ

「本当に・・・本当に心配したんだから・・・！」

メディが涙目になってきていた。

タイト

「その・・・ごめん・・・」

メディ

「もう1人で無茶しないって約束できるなら許してあげるわ。」

タイト

「わかった、約束するよ、だからそう泣きそうになるなって。」

メディ

「泣いてません!!」

メディは安心して若干笑顔になった。

銀時

「あーその名の知らねえお二人さん、感動の再会は後にしやがれ。」

銀時が話を割って入ってきた。

零児

「確かに、なにやら敵さんがごちゃごちゃ言いだしたぞ。」

二人が確認すると兵士たちは通信をしていた。

通信を終えると、先程零児達がいた世界に現れた、鎧を身にまとっている顔が無い白い化け物が出てきた。

タイト

「こいつらまた!!」

小牟

「知っとるのか？」

メディ

「私達の部隊がえた情報が正しければあれはエミルダークの新兵器です!!」

キラ

「新兵器!?!? あの人型見たいなのが!?!」

その新兵器はうねうねと体を曲げ手には剣が体の一つとしてを表している。

ナルト

「新兵器だかなんだか知らねえけど、敵だったらぶっ飛ばすまでだつてばよ!!」

ナルトは腕をバシバシ叩きながら戦闘態勢に入っていた。

それに釣られて他のもの達も戦闘態勢に入っていた。

エリオ

「あの・・・シグナム副隊長、あの人達は味方と見ていいのでしょうか？」

シグナム

「わからん・・・だが高町達が連れてきたのだから味方と見ていいのではないか。」

ヴィーダ

「そういう事だ！ ごちゃごちゃ言っていないでさっさと片付けるぞおまえら！」

フォワード陣

「」「はい！！！！」「」「」

かくしてエミルダークVS時空管理局、再び戦いの火蓋が落とされた。

これから起こる最悪の事態が起こるとも知らずに・・・

第十五章 少女の目的、そして再会（後書き）

いかがでしたか？オリキャラヒロイン、メデイ・ユグラムが登場、そして再び再会した仲間たち、そしてやつとこさできた他の作品どうしのクロス。コレも皆様の応援があつてこそその頑張りです。本当に・・・タイト「ありがとうな！！」「いやまてそれは僕の・・・まあいいや、それでは・・・メデイ「次回もお楽しみに！」おいしいいい！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6624g/>

クロス オブ ヒーローズ

2010年10月8日21時44分発行